
ゲームの世界で第二の人生！？

シェイフオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームの世界で第一の人生！？

【Zコード】

N4709W

【作者名】

シロイフオン

【あらすじ】

目が覚めると俺はゲームに良く似た世界にいた。

それだけなら別に構わないが、薄汚い路地裏で寝転んでいた浮浪児からスタートだなんてどんな上級者プレイだ？
まあ、良いだろう。

おれはこのゲームをかなりやり込んでいるからこの程度で心が折れることはない。

さてと、ログアウト出来ないのは放つておいてまずは生活できるほどの環境ぐらいは整えるか。

人物紹介（前書き）

これからどんどん加筆していく予定です。
書き込む順は私の気まぐれですが、主要キャラは全員書き込むので
ご安心を。
ネタばれを含みますのでご注意ください。

人物紹介

ユウキ＝カザクラ

本編の主人公。

突然訳も分からずゲームとそつくりな世界に飛ばされたにもかかわらず慌てなかつた。

これは本人は夢だと考えていることが起因している。

そのため己の行動に対する責任というのが曖昧で、キッカ達浮浪児と同居するなど常識では考えられない行動を取る。

技術や調合がチートであり、材料さえ揃えば作り出せないものはない。

エルファ＝ララフル

主人公のメイド

鮮やかな緑色の髪と白磁の肌、そして顔のほりが深いので人形のような印象を与える。

主人公に対しては結構厳しく、辛辣な言動を行うことが多いある。

サラ＝キュリアス

主人公を師匠と呼ぶ鍛冶屋の娘。

主人公が作成した武器に感銘を受けて自ら弟子入りを願った少女。くすんだレンガ色の髪や同年代と比べてやや長身で筋肉質なことから年上だと見られる場合が多い。

天才型の人間で、鍛冶に関しての才能は底知れないが、それ以外になると全く駄目である。

キッカ

主人公が拾つた浮浪児その1。

活発な性格でそのエネルギーを表し、髪も瞳も燃える様に赤いのが

特徴。

気安い性格をしており、誰にでもフランクに接することが出来るので人気者である。

主人公に拾われる前は4人組のリーダーとしてスラムを生き抜いていた。

冒険者を志望しており、将来は前人未到の地を踏破することが目標。アイラ達を仲間と表現するなら主人公を親と考えている。

アイラ

主人公が拾つた浮浪児その2。

キツカとは正反対の冷静沈着な性格をしているが、思い込みが激しいのでたまに暴発する。

青い髪と切れ目が特徴で、周りに油断ならない人物という印象を与えていている。

諜報や謀略の類を好み、合理性を追求するので容姿にはそんなに拘らず、髪も短く切り揃えている。

主人公に拾われる前は、4人組の頭脳として活躍していた。主人公を主として捉え、絶対の忠誠を一方的に誓っている。

ユキ

主人公が拾つた浮浪児その3

無口な少女で何を考えているのか本人以外誰にも分らない。

浮浪児なので何の教育を受けていないにも関わらず王国最高峰の魔法学校に入学出来た。

ある意味主人公以上のチート能力保持者。

クロス

主人公が拾つた浮浪児その4

大柄な体格と優しい性根の持ち主。

その体力はどう学年でも飛びぬけており、一人だけ成人年齢が受け

る訓練をこなすことが出来る。

主人公はクロスを成人だと疑っているが、キッカ達は主人公や自分達と同じ年齢だと言い張っている。

攻撃よりも防御に関心があつたので主人公はクロスにファイアーエムブレムに登場するアーマーナイトに近い鎧を装着させた。

無一文から始まる（前書き）

始めまして、シェイフオンです。
経験を積んだ主人公というチートな能力を使って襲いかかる不合理
から必死に抗おうとします。

剣術から裁縫まで全てMAXレベルにまで上げた経験のある主人公
がどのようなセカンドライフを歩むのか。
それを楽しんでいただければ幸いです。

無一文から始まる

気が付くと俺は子供になつて薄汚い路地で倒れていた。
いや、「冗談じゃないよ？」

一応自己紹介しておこう

俺の名は火桜優喜。フルダイブ型MMORPGにぶっぱりハマつた高校一年生だ。

一応学校は通っている。ゲームが大好きだが平均点はクリアしている。

本音を言えば学校を辞めてずっとゲームをしたいのだが、それをやると確実に家を追い出される。

比喩じゃない、マジ話だ。

何せ内の親はやると言えば必ずやるタイプ。
どれだけ理不尽な約束でも絶対に履行するのだ。

……へタレと嘲つても構わない。

俺も自覚しているから。

閑話休題

俺の時代にはフルダイブ出来る機械がある。
ん？ それは何だつてか？

それはヘルメット状の形をしたもので、脳からの電気信号を受け取り、そして逆に変換した信号を流すことによつてあたかも現実に存在しているよう錯覚させる機械だ。

洗脳されそうで怖いと感じるだろうが、正直俺達にはこれが無いとともに授業についていくことが出来ない。

何せ高校一年の授業で不確定性原理を応用した問題を出されるんだぜ。

教科書だけで解けるか。

機械に頼らないと出来るわけがない。

そして俺は文系だ。ついでに言えば理系はもつと恐ろしいぞ。数字の羅列を見ただけで何を意味しているのか理解できるんだ。スパイ養成課か、と思ったよ。

まあ、その機械のおかげで俺達は限りなく全能に近づいているがな。

普通の俺でさえ過去の名医と同程度の執刀が出来る。

また話が逸れた、すまん。

とにかく、俺はそのフルダイブ機械を使ってMMORPGをやっていたわけだ。

まあ、やつていることと言えば、パーティを組んで魔物を討伐するのではなく、ひたすらにアイテムを作つてそれを売り捌いていたわけだけどな。

ダンジョンにはレア素材を探すために潜る程度だったし。

そのゲームはヨーカリア大陸物語。

各プレイヤーは望みの職業になつて冒険者になつたり国を興したりと色々と自由度の高いゲームだ。

ここからが本題だ。

俺はいつも通り学校へ行き、いつもの通り帰宅していつも通りゲームを起動させた。

普通なら俺は拠点としている工業都市ジグサールから始まるはずだった。俺は大富豪で、その都市に対して影響力がある。顔もイケメンで背の高いハンサムなキャラクターだったはずなのに、俺は気が付くとどこか訳の分からない街の裏側で倒れていた。

さあ、どうしたことだ？

眼が覚めた俺はまず始めにウインドウを開いて見た。

ウインドウに表示されるのは名前とステータス、持ち物や装備の他にゲームを終わらせるログアウトがあるはずなのだが。

「……ない」

その欄は空白になつてあり、田をこすつても変化が無かつた。どうやら不本意なバグが起つたのだと考える。

「仕方ない、しばらくここで生きるか」

喚いたり叫んだりしても意味は無い。それならば一度初心に帰つたつもりで始めからプレイしてみようと決めた。

「まずは何を持っているのか」

俺はもう一度ウインドウを呼び出して己の状態を確認する。

名前：	コウキ=カザクラ
装備：	武器 なし
防具	ボロの服
頭	なし
足	擦り切れた靴
装飾品	なし
持ち物：	なし
お金	0 G
ステータス	なし

「……何だこれは？」

その惨状を見て愕然とする。

良いところが一つも無い。普通ならお金も3000Gぐらいはあり、ステータスも幾らかは自由に設定できるはずだ。

ステータスというのはスキルの別称で、例えば剣を振るとステータスに『剣』という項目とレベルが追加され、そのレベルが上がることにSTRやDEFなどが上昇する。

ちなみに『短剣』のスキルが上がると『剣』と比べてSTRよりもAGEが上昇する。

そして、スキルが1から2に上がると能力の上昇は2または3程度だが、スキルが20代だと能力の上昇率は2桁まで上がる。ゆえに満遍なくスキルを伸ばすよりのと、一つのスキルを伸ばすのではあまり大差ない。

閑話休題

これだとボーナスポイントを使わず、さらに所持金を全てじぶんに捨てた状態だ。

そして、それ以上に驚いたのは。

「この容姿は何なんだよ」

見た感じ五年前の俺である。年齢は12歳前後と言つたところか。「まあ、上級者の俺にはちょうど良いかな」

初心者なら間違いなく匙を投げているが、生憎と俺はこのゲームをやり込んでいるマニア。だからこれくらいのハンデなど物の数ではない。

「とりあえず最初の目標は一軒家を持つことだな」

家さえ持つことが出来れば行動範囲がグッと広まる。薬を大量に調合出来たり鍛冶を出来たりとメリットは計り知れない……まあ、月々に税を納めなければならない欠点があるがそれは仕方ないだろう。

「さてと、じゃあ始めますか」

俺はそう呟いた。

しかし、俺はこの時、これから先に起ることなど想像すらできなかつた。

手頃な空き地に移動した俺は簡易な調合台を作成する。

「まずはポーションの調合法から」

ポーションとはHPを回復する薬の中で最も安価で親しみやすい類のだ。値段は一個50Gと安いが、材料となる草はそこら辺に生えてるので原価はほぼ0。まさに初期に作る物としては打ってつけだ。

「そういえば序盤の頃もこうしてポーションを調合していたよな」何世代前のゲームとは違つて材料を揃えてボタンを押せば完成という代物ではない。そして、このヨーカリア大陸物語というゲームはフルダイブ機能を駆使してリアルを極限にまで追求した結果、現実と同じように調合の匙加減で成否が分かれるのだ。

まさしくリアル志向。

現実と何一つ変わらない。

ゲーム製作者に殺意を覚えるほどリアルだ。

「確かポーションの調合法は……」

俺は頭の中からポーションの調合法について引っ張り出す。

ああそうだ、確かああいう作り方だった気がする。

捨ててあつた竈と檻を拾つてお湯を炊く。

沸騰するまでの間に材料の草をすり潰しておこう。

「……子供だから力がない」

普段ならシャシャシャシャとやつてしまつ作業が渾身の力を込めて行わなければならなくなつていてる。だからいつもの倍の時間と労力を費やしてしまつた。

「さてと、次はこれらの材料を手順通りに放り込んで混ぜると、まずアカイロ草をすり潰したのを加えて混ぜ、色が淡くなつたらアオイロ草を加える。ここから激しくかき混ぜて完全な薄紫に

した後キイロ草を加えて今度はゆっくり混ぜて完成。

「まあ、上出来かな」

ポーションを調合しているうちに体が思い出してきた。俺の経験から言つとここれは良い部類に入るだろう。

確認のため出来たポーションを少し飲んでみる。いつも俺が作っている上質なポーションと比べれば劣るもの、市販品よりかは味も効果も高いと判断。

「さすがは俺、弘法筆を選ばずとはよく言つたものだ」「うん、満足。

そして俺はそのポーションを持って薬売りの店に行く。ここは様々種類の薬を取り扱つており、その中にポーションが含まれている。そして俺はその店の番人をしているお姉さんに声を掛けた。

「ほんにちは、おねいちゃん」

「一ヶコリと、キッズスマイル全開で話しかける俺……気持ち悪い。「あら、ボク。どうしたの？ お使い？」

まあ、そうだろうな。俺もお姉さんの立場ならやつ判断するだろう。しかし、俺はお使いでは無い、営業をしに来たのだ。

「おねいちゃん、このポーションをどう思う？」

そう言つてガラス瓶に入つたポーションを見せる俺。

「あら、それは……」

お姉さんの瞳に真剣見が宿る。やはりそこはプロなのだなあと実感した。

光に透かしたり、振つてみたり味を確かめた後にお姉さんはホウツと感嘆の吐息を洩らす。

「ボク、これは凄いわよ。少なくともこの街にいる調合師じゃ一個一個丹念に作つてもこのレベルは作れない。一体どこの調合師が作ったの？」

そう聞いたので俺はにこやかに自分を指差す。

「え？ ボクが作つたの？」

「うん、そうだよ。なら目の前で実演してあげようか」

お姉さんが頷いたのを見た俺は予め用意してあつた原料を取り出

す。

「それってそこいら辺に生えている雑草じゃないの。もつと質の良い草を使用しないと飲めたものじゃないわよ」

忠告してくれるは有り難かつたけど、俺は首を振った。

薬売りの店の奥には調合台が備え付けている。やはつこのお姉さんも調合師の端くれなのだな。

「じゃあ、作るからよく見ておいてね」

そう宣言して俺はポーションを作り始めた。
昨日と手順は似ているが微妙に違う。今回はアカイロ草と一緒にアオイロ草を加えたり、薄紫からさらりと透明になり始めた所でキィロ草を追加したりしていた。

お姉さんの言う通りに、これらの草は生えているのよりも栽培した方が手順の変更がなくて楽だが、その分お金がかかる。

と、言つても一草3、4Gなのだが、それでも今の俺にその出費はきつかつた。

どうせ俺はこれ以上の難易度を誇るエリクサーを何度も調合しているし。

あれはきつかつた。ほんの少しでも力加減を間違えると失敗。しかも嫌らしいのが、エリクサーは失敗した時点には現れず、完成してからその失敗に気付く点だ。

あれで何人ものプレイヤーがエリクサーの調合を諦めたか。

「はい、完成したよ」

そう昔の思い出に想いを馳せている内にポーションが完成したようだ。それをコップですくつてお姉さんの前へ持っていく。

お姉さんは皿をまじまじと見開いた後、それを口に含んだ。

「素晴らしいわ」

しばらく咀嚼した後にそう吐息を洩らすお姉さん。

「これはすごいわ。私の人生の中でもこれほどのポーションにお皿

にかかったことはない、これなら50Gと言わず、100Gでも売れるわ

早口に捲し立てるお姉さん。それを見た俺は手応えを感じて切り出した。

「ねえ、おねいちゃん。提案だけじゃ、このポーションをここで売つてみない？」

博打よりも安定的に収入を得られるのを優先する。確かに露天商は利益が相当出る代わりに、ならず者による強奪が考えられるし、また売り上げ代をいくらか取られる可能性がある。今の時点で闇の者と関わるのは避けた方が良い、今後の活動に大きな支障が出る。

「ええ、いいわ。むしろこちらからお願ひしたいくらい。とにかくボクの名前はなんていうの？」

「ユウキ＝カザクラだよ。おねいちゃんの名前は？」

「私の名はティータ＝エルマライよ。これからよろしくね」

交渉の結果、俺はポーション一つ分につき30Gの利益が出ることになった。もちろん、この俺の正体を隠すというのが条件付きで。

「とりあえず今日宿に泊まる分のGは確保できてよかつた」
ポーション一個で60G。今回はおまけとして200G余分にくれた。

よし、これなら今日は宿に泊まれるな。

俺は人知れず安堵した。

今日の収穫

収入元を確保できた。

無一文から始まる（後書き）

フルダイブ機能という設定について説明不足でしたので修正しました。

11 / 4 設定を変更しました。

俺は仲間を得た

合計して260G。100万G以上持っていた俺にはこの金額が物足りなく感じるがまあ良いだろう。

何せ全くの無一文からこれだけのGを得たんだ。

さらにこれからポーションを売る」とによつて安定的な収入を得ることが出来る。

「いやいや、お金のありがたさを感じるねえ」

俺は十一歳の少年とは思えないセリフを吐いた。

クルルルル

「お?」

宿屋に向かつていると突然俺の腹から鳴つた。

「ん? ゴーカリア大陸物語に腹が減るなんてことはあつたっけ?」

酒場などで食べ物を吃べることはあるが、必ず食つ必要はなかつたはずだ。

ぐーーっ

「……とりあえずは腹ごしらえだな

腹の虫には勝てない。

俺は腹が減る、減らないにつけての考察は後回しにして近くのパン屋へ向かつた。

「毎度ありがとうございます。お釣りは五(S)シルバーと一(B)プロンズです」

適当なパンを見つくるつて俺は代金を払つた。

そして手元に残る銀の硬貨と銅の硬貨。

この世界の通貨は1Gで10S。そして1Sで10Bとなつている。

まあ、食料品や安物の素材の単価に付けられるBなんて使う

「」とは最近だと滅多にないから忘れていた。

何せ俺がGを使うと言えば何千G単位だから。

「さてと、食べるか

俺は近くのベンチに腰を下ろし、ついでに買った飲み物もすぐ横に行く。

出来立てらしくパンはまだ熱い。

ふわふわとしている。

「さてと、いただきまー……」

俺が大口を開けてかぶりつこうとした瞬間田の前の少女と目が合った。

「……」

少女は何も言わないが、田はしつかりと訴えている。パンをくれと。

年代は俺と同じぐらいだな。

服装は俺と同じボロの服を着て金色の髪はまだ湿り、顔も薄汚れている。

元は良いのに台無じだと感じる。

見た感じ小動物という印象を受けた。

「……すい

試しにパンを右から左へ移動させると少女の田もそれに続ぐ。グルグルと回転させたら同じように少女の田も回転した。

「きゅー」「きゅー

どうやらやりすぎで田を回してしまったらしい。

俺は調子に乗ってしまったと反省した。

「悪かった。ほら、これをするよ」

お詫びに俺は手に持ったパンを差し出す。幸いにもまだ口を付けていないからセーフなはずだ。

「……くれるの?」

途端に少女の田が輝き出す。

本当に素直だなと感心しながら俺は頷いた。

「……ありがと」

「つて、おー！？」

少女は差し出したパンでなく、俺の隣にあつたパンの袋を掴んで一目散に駆け出して行く。

「ちょっと待て！ ドロボー！」

俺は叫ぶがもう遅い。すでに少女の姿は見えなくなっていた。

「はあ、相手がNPCとは言え腹が立つな」

俺は毒づきながらもまたパン屋に赴き、同じパンを注文した。店員に不思議がられたが、俺が少年口調で事情を説明するとパン屋の店員はクスクス笑い始めた……値段を安くするとかちょっとはサービスしてくれよ。

そして俺はまた同じベンチに座った。

キヨロキヨロと周りを見渡し、また同じアクシデントが起きないか確認する。

前方良し、左右良しそして前方良し。

俺はパンを手に持つた。

そして食べようとしたその時。

「本当に申し訳ありません！」

後方から突然大きな声で謝罪させられて俺は引っくり返ってしまった。

俺の目の前には四人の少年少女がいる。女子三、男子一の比だ。しかもその女子の内の一人は俺からパンの袋を奪つていった無口女だった。

「ほら、謝りなさい！」

「……ん」

そのリーダーらしき女の子に小突かれて先程の無口女が頭を下げる。

リーダーらしき女の子は凛としていて口調もはきとしている。薄汚れているが、髪を洗えば燃えるような赤毛を見せるだろうと想像した。

俺は手を振りながら。

「いや、もう良いよ」

と、答えた。

「盗みを働き、本当に申し訳ありません。ユキは本当に良い子なんです、感情表現が下手ですけどそれは生まれつきなんです」

無口少女はユキという名前なのか。

「申し遅れました。私はキッカ、後ろにいる切れ目がアイラそしてなよなよしている奴がクロスです」

「よ、よろしくお願いします」

「よ、よろしく」

同時に頭を下げるアイラとクロス。アイラの方は髪が藍色であることも相まって冷たく、鋭く切れるような印象を与えてクロスの方は俺と同じ黒い髪と瞳から真面目で実直なイメージがある。

「何度も言つたように僕はもう怒つていなか。だからもう消えてもいいよ」

何度も言つているのだが四人組の少年少女はこの場から去りうとしない。そして謝り続けている。

「……ああ、そういうことか」

再三言つても謝り続けるのを見て俺は得心した。

彼らは単に謝罪しに来たのではない。それ以上のものをせびりに来たのだ。

「これで良いか?」

俺は観念して財布から一〇G硬貨を取り出してキッカという少女に渡す。

「き、金貨だ」

「……きれー」

クロスとユキが一〇Gの光具合を見て感嘆のため息を漏らす。

「ねえ、ここでやめちゃう?」

「そうですね……」

そしてキツカも動搖して後ろのアイラに相談を始める。

「やれやれ、いい勉強になつたな」

俺はため息を吐いてその場を後にしようとした。これ以上関わっても仕方ない。

「お待ち下さい」

が、少女に似つかわしくない氷の様な冷たい聲音が俺を引き止める。

「ええと、確かアイラだけ?」

俺が振り向いて尋ねるとアイラはコクリと頷いた。

「僕はもう話すことはないのだけど」

俺は声音を低くして問う。これで俺が苛立つていることが相手に伝わるだろう。

「あ、アイラ、もう止めようよ」

「アイラさん、ストップストップ」

「……怖い」

事実、後ろの三人も怯えているようだ。

しかし、アイラは意にも介さず言葉を紡ぎ始めた。

「私達を買ってくれませんか?」

「は?」

突然の申し出に俺は呆気に取られる。

「アイラ! ? 何を言つてるの?」

「そ、そうですよ。いきなり何を

「……おー」

後ろが困惑しているのが伝わってくる。

「あなたは私達と同じ浮浪児の格好をしていますが中身は全く違う、一人で自立できる能力と自信を持っています。あなたは必ず瞬く間にこの最底辺から抜け出すでしょう」

「まづ……」

俺は感嘆のため息を漏らす。

アイラの言う通り俺は違う。薬の調合も出来るし鑑定の用聞きも出来る。さうに鍛冶も出来るため、あつといつ間に駆け上がるだろう……チートだし。

「NPCにしては洒落た誘い文句だな」

「NPC?」

アイラが首を傾げるが俺は気にしない。

「まあ、面白そうだから仲間にしてみるか」

どうせこのデータはバグであり、エラーから復旧すれば消えてしまう運命にある世界。

それなら付き合つてやろう。

俺は彼らをもう一度まじまじと見つめる。

「どうですか?」

田の前のアイラは間違いなく抜け目がないだろう。ユキがパンを持つてきたところからここまで持つてくるのは並大抵のことではない。

キック力は決断力というか思い切りが良い。俺に声を掛ける時もうだが、彼女は竹を割った様な潔さがある。

クロスは大柄な体格だから力もあるだろう。これなら暴漢に襲われても大丈夫かもしれない。

ユキは確実に何かを持っている。ユキがいなければ俺達は出会うことすらなかつただろう。

「よし、ついてこい」

「え? つまり受け入れてくれるのですか」

確認するようにアイラが尋ねると俺は苦笑しながら。

「その通り、だから俺について来てくれ」

俺は仲間を得た（後書き）

2011年9月13日に一部改編しました。

紺屋の白袴

「どこへ行くのですか？」

「まあ、ついてくれば分かる」

俺は疑問を口にするアイフにやっけなく答える。

「急に乱暴になりましたね」

「否定はしないな」

猫を被るのは疲れるんだよ。

確かにこら辺りに文房具屋があつたはずだ。薬屋から宿屋へ向かう途中で見た気がする。

「ああ、あつた」

お田端での店を見つけた俺は文房具屋へ入つて羊皮紙とインクとペンを購入した。

「さて、洋服屋へ行くか」

「……買つてくれるの？」

田をキラキラさせるコキには申し訳ないが、さすがに五人分の服を購入できるだけのGは無い。だから俺は首を振る。

「それはまたいつか今度だな」

不満顔を隠そとしないコキに苦笑しながら俺は洋服屋へと歩を進めた。

「ここはお前らが来る所じゃない！ 帰れ帰れ！」

案の定、店員に入ることを断られる。

まあ、そうだろうな。

浮浪児の集団など洋服屋に縁など無いからな。あつたとしても万引きか。

「はい、これ」

俺は店員に断られるのを想定済みだったので動搖なく10Gを店員に握らせる。

「え？」

突然の出来事に驚いたものの、店員は得心が言つたように後ろへと下がつた。

「さあ、入るぞ」

後ろで所在なさげにうらうらしていた四人に俺はそう呼びかけた。

「気に入つた服があれば俺に見せてくれ。ただし、縄を使つている服は駄目だ」

変な指示だと思ったのだろう、代表してキッカガ尋ねる。

「どういうこと？」

「レベル上縄素材で服を作成するのは無理だからな」
木綿や麻、布は今の俺でも作れるが、縄になるとレベルが一ケタ必要だ。

「もしかしてあんた、服を作れるの？」

「ああ、それが何か」

店で装備を買うのは中級者まで。上級者になると装備は全て自作になる。

何せ一人一人のプレイヤーに個性が出るため店のものでは対応できなくなるのだ。

俺も最終的にはドラゴンアーマーなどを普通に作つていた。

「……どうした？」

ユキを除いた全員がポカンとした表情で俺を見つめる。

NPCが戦闘以外で驚くことなんてあつたっけ？

俺が内心で首を捻つている間に四人が集まってコソコソ話し合つていた。

「ちょっとアイラ、私達つてすごい人を見つけたんじゃないの？」

「ええ、私もここまでとは思いませんでした」

「夢なのかもしれないよ」

「……それなら殴つてあげる」

興奮しているのが全然内緒話になつていない。

俺はため息をついて先を促した。

「おーい、早く決めてくれ」

洋服屋から出た俺達は布屋へと向かつ。

上質な布は4桁Gもするが、生憎と今の俺達には用が無い。あるのは値段がB単位の布だ。

「ええと、緑色と青、そして赤色の麻と黒と白と黄色の綿だな」

羊皮紙に書いた字を眺めながら俺は注文する。

お金を払つて商品を受け取つた。

「荷物持ちは任せて」

後ろの方で控えていたクロスが俺の代わりに受け取る。四人分の布だから結構重いはずだが、クロスは顔色一つ変えなかつた。

「力が合つて羨ましいな」

ポーション一つ作るにもしんどい俺がそう漏らすとクロスは困つたようにはにかんだ。

その後には雑貨屋へ行つて糸と針とボタンを購入した。

「一人一泊20Gです」

「分かつた」

俺は頷いて五人分の代金を支払つた。

俺達がいる場所は宿泊街の一角にある宿屋だ。

本来なら薬屋のお姉さんが勧めた宿屋に入る予定だつたのだが、出費が増えたのでお金が足りなくなつた。

困つていた俺にここら辺の地理に詳しいキッカがいい宿があると助言して今、ここにいる。

「悪くはないな」

キッカ推薦の宿屋に入った第一印象がそれだつた。

『マミールの夢』という名の宿屋で、一階が酒場そして二階が宿屋のオードソックスな冒險者の宿だった。

三人部屋を一つ借りて俺とクロス、そしてキッカとアイラ、そしてユキに分かれた。

本来なら一人部屋を借りるのだが、これから作業するので手広い部屋が欲しかったのだ。

俺は主人に別料金として石鹼とお湯の代金を支払って四人に入るよう促した。

もちろんレディーファーストだ。

三人部屋に五人は多過ぎだろうと考えたが、俺達は子供だったので十分スペースがあった。

全員集まつたところで俺は買ってきた布で服を作りながら話を切り出す。

「ここは何という街だ？」

俺の質問にアイラが答える。

「シマール国の王都、カルギュラスです」

「カルギュラス……」

俺は口の中で反芻させる。

ヨーカリア大陸においてカルギュラスといつ名の場所はあった気がする。

しかし、俺が知っている中では少なくとも街じゃなかつた。

「廃墟じゃないのか？」

ゲーム上の設定ならばカルギュラスは魔物の大進行によつて滅びているはずだ。俺が昔クエストでその場所へ向かつたのだから間違いない。

「何を言つてているのですか？」

アイラが首を傾げる。そつだうつな、俺がアイラの立場でもそつだうつな。

気になつた俺は今日の年数を尋ねてみるが。

「さあ？」

と、返された……まあ、浮浪児に年数など知つていいわけないよな。そこら辺りは明日薬屋のお姉さんに尋ねてみるか。

「ほい、一着完成」

ユキの服が完成した。白をベースとしたワンピースでアクセントとしてリボンが付いている。

「……ありがと」

そつけない返事だが、内心は大いに喜んでいるのが分かる。だつて耳たぶが赤いもん。

「明日からはどうする予定ですか?」

アイラが明日からについて聞いてくるので俺は正直に話した。

「明日の午前中はポーションの材料となる草を取る予定だ」

「ポーション? 草?」

アイラが疑問符を浮かべるので俺は苦笑して訳を説明する。

「実は今日薬屋の主人であるティータさんと交渉してポーション一個につき三十Gで引き取る取引をしているんだ。だからポーションの材料となる草を集めるわけ」

俺がそこまで言つと、他の四人はまた隅っこで集まって内緒話を始めた。

「ねえ、聞いた? あいつは安定的な収入があるのよ

「これならもう『ミミ漁りしなくて済みそうですね』

「これは夢だ、きっと夢だ」

「……可愛い服」

若干一名会話に加わっていよいよに見える。

しかもやはり声が大きいので内緒話になつていない。

「ほら、出来たぞ」

俺はアイラが選んだ黄色のブラウスと青色のロングスカートのセットを横に置いた。

無論、アイラがすごい勢いで取りに来たのは言つまでも無い。

「ういう所はやはり女の子で子供何だなあと、外見子供の俺が微笑ましく思った。

「あの、お手伝いできませんか」

次の服の作成に取り掛かっているとクロスが口火を切った。

「ん？ どういうことだ？」

手の動きは止めないまでも俺は返事をする。

「アカイロ草とアオイロ草、そしてキイロ草を集めているんですね」

「そうだな。ポーション作りにはその三つが不可欠だ」

「それらの草は雑草でどこにでも生えています。だから自分達がそれを集めるというのはどうかな？」

「そうしてくれると助かるな、手間が省ける」

「俺がそう答えるとクロスはパッと顔を明るくして。

「そうですか、ありがとうございます」

「礼はいい。そして、キッカの服が出来たぞ」

赤を基調としたこの世界のオーダーソックスな服装なのだが、スライドでなくズボンとしているのはキッカは動きやすい冒険者が着るような服を選んでいたからだ。

キッカがそれをうつとりと見つめているのを見ると俺も嬉しくなる。作った甲斐があつた。

「ああ、それなら作業用の服を作るための布を買ってくるんだったな」

俺は失敗に気付く。

雑草を拾うとなれば当然服は汚れてしまう。そして、俺がさつき作った服は彼らのお気に入りであり、機能性は重視されていない。

「……大丈夫」

さて、どうしたものかと悩んでいると、それを察知したのかユキが慰めにくる。

「何が大丈夫なんだ？」

「私達は雑草取りをしない。その代わりにユウキが作った服を売る」

「なるほどね、そういうことか」

俺の技能はポーション作りだけでない。今、実演しているように

裁縫も得意だ。だから服を作つてそれを売ればいいとユキは提案していた、が。

「それは止めた方が良い」

露天商は俺もやろうとしたが、リスクが高すぎて止めた。ショバ代とか言つて金を取られるならまだしも変な奴らと関わり合いたくない。

「言い方は悪いが君達から俺の情報に辿り着く奴らが現れないとは限らない。俺はまだ目立たたくないんだ」

いづれは関わり合いになることだろう。

しかし、それは今でない。

何の力も無しに闇の者と関わり合うと待つてゐるのはゲームオーバーだ。

「……残念」

ユキは不満そうな顔をしていたが、俺が絶対に折れないことを悟るとしぶしぶ引き下がつてくれた。

俺はそんなユキの頭をポンポンと叩いて。

「アイディア出してくれたことは嬉しい、だからそんなに落ち込まなくてもいいぞ。そして、クロスの服だ」

クロスはTシャツに短パンと少年らしい服装を好んでいた。アクセントとしてポケットが四つも付いている。

全員の服を作り終えた俺はワーンンシッヒー伸びした後彼らに言った。

「君達全員にお小遣いを上げるから明日は街で遊んでおいで。けれど明日からはちゃんと働いてもらうよ……って、聞いていないな」四人は俺が自作した服を眺めるのに頭が一杯らしい。全員が興奮した面持ちで服の見せあいをしている。

俺はその様子を眺めながらベッドへ横になる。

ふかふかの感触を楽しみながら今日一日の出来事について思いを馳せた。

いきなりログアウト出来なくなつたり、ステータスが貧弱だった

りするが、今日の行動は悪くなかったな。

明日からはティータさんの所へ行ってボーション作りだ。これで
しばらくお金を稼ぐか。

そう言えば靴を作るのを忘れていたな、明日も雑貨屋さんへ行つて材料となる皮でも買うか。

頭がぼんやりしてきた。どうやら本格的に寝るらしい。

いつも思つけどゲームの中で眠るところのは不思議な感覚がするんだよな。

そう言えば大事なことを忘れていた気がする。

確か、何だけ？

俺は睡魔によつて使い物にならなくなつた脳をフル回転させ、次にキッカやアイラ達が持つてゐる服を見て思い出した。

あ、自分の服のことを持っていた。

紺屋の白袴（後書き）

次の話の内容は半月ほど時間が飛んだ時点から始まります。
四人が素材を集めて主人公のユウキがポーションを作る。
そんな日々が続いていたのですが、ある日クロスがお願いをユウキにすることになります。
さて、その内容とは。

魔物退治（前書き）

すいません。

予告通りの内容にはなりませんでした。
内容が長くなり過ぎましたので一分割します。

カンカンカンカーン！

ジューー！

「うん、まあまあかな」

俺は先程製造が終わつた青銅の剣にそう評価を下す。

この武器はキッカが使用するので市販の青銅の剣よりも細くして軽さを上げていた。

けど、強度まで下げたわけじゃないから。むしろ2倍以上の耐久性がこの軽い青銅の剣に宿っている。

キッカは「大人と同じ武器を扱いたい」とか駄々こねていたけど、どれだけ粹がついていても俺達は12歳の子供だからね、大の人人が使う武器を軽々しく振りまわせないから。

「さてと、後はアイラが使うボウガンの矢じりとユキが使うロッドだけか。おじちゃん、まだ使わせてもらつて良い？」

俺が店に奥にいる職人にそう尋ねると「あいよ」という返事が返ってきた。

良かった、これで今日中に作れそうだ。

何せクロスは力があるので普通の武器と比べて一回り大きいのを作った。サイクロプスやキングアリゲーターなど大型モンスターとの闘いを想定した武器で、例え鎧を着っていても、鎧ごと一刀両断するのを作ろうとしたが、それが想像以上に大変だった。

俺はこの時ほど子供であることを悔やんだ経験は無かった。

何せ重い。

ハンマーを打つのにも水で冷却するのにも既存の武器と比べて倍以上の負担がかかる。

たった2倍程度の負担ぐらいたつことないと考えた時期が俺にはありました。

もし、過去に戻れるのならばその時の自分を殴ってやりたいです。

手を抜くと失敗してしまっから休めません。正直最後の方は意識が朦朧としていました。

どうやって宿屋に帰ったのか覚えていません。

気が付いたら朝でした。

筋肉痛で腕がえらいことになっていましたが、納品であるポーションを作成しなければならないので根性でやり遂げました。

ちなみに俺が作った『鋼の大剣』をクロスは軽々と振り回していました。

……俺は持つことすらできないのに。

勉強とは大事なものだ。

それを怠ると最悪死へと繋がる。

だから俺は心を鬼にしなければならない時がある。

「もう勉強嫌」

そう、例えキッカを鎌と手錠で机に拘束させてでも知識を叩きこむ必要があるのだ。

「だから何度も言つていいだろ？ 字を覚えろと、それが出来なければ何も始まらないぞ」

「字を読めなくとも、勉強できなくとも死なない」

「死ぬから言つてんだろ？ が！」

俺の一喝が部屋に響き渡った。

「つたく、キッカ以外はすでに魔物特性の勉強に入っているのに、お前だけは机にじつとしていることすらできないよな

浮浪児としての生活が長かつたのか、最初の内は全員椅子に座つても5分すら持たなかつた。まあ、浮浪児として行動しなければ死んでいたのだからじつと出来ないのは大目に見よう。

「放して、自由にさせへ〜」

が、それがいつまでも続くとさすがの俺も堪忍袋の緒が切れそうだ。なので俺は仕置きを兼ねてある紫色の液体を取り出した。

「そ、それは？」

キツカの動きがピタリと止まり、視線が俺の手に持っている液体へ釘づけになる。

「そう、精神安定剤入りポーションだ。これを飲めばキツカも大人しくはなろう」

ポーションにリラックス草加えると、飲んだ者を落ち着かせるという効力を持つ。アイラ達にも最初の内は椅子に座らせるためにこれを飲ませていた。

「いやー！ 苦いのいやー！」

ただこの薬、相当苦い。俺も一舐めしたが体が壊れるかと思った。例えるなら「ヤの中身の部分を5倍に濃縮した苦さと言つべきだろうか。

もしかするとアイラ達が素直に座ったのはポーションの効能なのではなく、一度とこの薬を飲みたくない恐怖観念からやえだらうか。

「さあ、口を開けておけよ。でないと鼻から入れるぞ

「たゞしけて〜！..」

キツカの悲鳴が宿屋中に響き渡つた。

昏前

外へと繋がる門の前に4人の少年少女が整列し、その前に1人の少女が剣を掲げていた。

俺、キツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスが装着している武器防具は全て俺の手作りだ。

ユウキ

青銅のダガー

革の鎧

革の小手

布の靴

キツカ

青銅の剣

プレートメイル

青銅の楯

革の靴

アイラ

青銅のボウガン

プレートメイル

ガントレット

革の靴

ユキ

ファイアロッド

絹のローブ

革の小手

布の靴

これだけ装備が充実していれば死ぬことはまずありえないだろう。どんなゲームにも最も装備は重要な位置を占める。装備を侮る者に勝利などありはしない。

その問い合わせたと答えるならば序盤から装備を一切変えずにラスボスまで行ってみてほしい。大抵の人は挫折するだろう。つまりそれだけ装備は大事だということだ。

俺が作った装備のおかげでキッカ達はレベルこそ一だが、そのステータスはレベル10程度にまで引き上げられている。近辺の魔物の生息についても確認したが、レベルが5もあれば集団で襲われても戦えるほどの難易度らしい。これなら負けることはないだろう。

ただ……

クロス

鋼の大剣

鋼の鎧

鋼の楯

鋼のすね当て

はい、1人だけ別格がいます。

おそらくクロスのステータスはレベル15にまで引き上げられています。

一度キツカがクロスを羨ましがつて鋼の楯を装備してみたけど、腕すら上げられない有様でした。

本当にクロスは俺と同じ12歳かと疑つたよ。

クロスが12歳と言つのは俺以外全員が主張していたけどね。

ああ、それとユキは魔法の才能があるらしいので魔法の扱い方に付いて多少レクチャーした。

まだ火の玉が出る程度だけど、この辺りの敵だとそれで良いだろ。

ユキはもつと火力を望んでいたが、危ないので教えなかつた。

ちなみに俺の現在のスキル。

採取	斧	魔法	剣
8	7	5	6

弓矢	5
料理	8
鍛冶	10
調合	15
裁縫	10

ポーション調合やら草採取やら武器作りやら4人に戦い方を教えるやらでこの半月の間に相当上がりました。

裁縫がこんなに高いのは俺が毎晩簡単な服を作っているからだ。作成した服は4人を通して無料で配つて歩いている。

これは利益度外視で行つてている。

裁縫というのは後々になつてから重要ななる。

極論を言えば剣や魔法などよりも重要。

何せ状態異常を防いでくれる防具を作ろうと思えば裁縫が必須だからね。

裁縫をめんどくさがつて上げなかつた俺は後でどれだけ苦労したか。

一ヶ月ぐらいずっと裁縫していた記憶がある。

おかげで学校の家庭科でUを取りました。

「皆、装備は持つたわね？」

一番張り切つてゐるのが剣を掲げてゐるキッカ。

聞くとこりによると昨日は興奮して眠れなかつたらしい。

アイラとコキが眠そうに目を擦つてゐる。

「コウキ、ポーションは大丈夫?」

確認することは良いことだが剣を俺ののど元へ突き付けるな。万が一があつたらどうする。

「ポーション、ポイズンボトル、パラライアウト、スリープブレイクなど近隣のモンスターが使う状態異常に對する対策は整つている」

「そう、上々ね」

キッカが当然とばかりに頷くがこれらは高いんだぞ。

もし俺が作った薬を一式買おうとすれば300Gは普通に飛びぶといつ事實を忘れてはいまいか。

と、ここでコキがクイクイと俺の袖を引っ張つた。

「……お弁当は?」

「全部コキの好物にしていん」

「ん」

俺の答えに満足したのかコキは満足そうに頷いた。

「思えばここのまでの道のりは長かつたわ」

外に出た俺達はキッカを先頭にして進んでいると、不意にキッカがそう口火を切つた。

「ここの瞬間を私はどれだけ待ち望んでいたか」

「感動するのは勝手だがキッカがちゃんと俺の教えた通りにすればもっと早くかつたぞ」

今は青銅のダガーしか装備出来ない俺だが、前のデータの時は剣術もレベル93あつた。だからその経験を生かして戦いの基本を教えていたのだがキッカは全然聞いてくれなかつた。

「あんな型に嵌つた動きじや意味無いわよ」

ここのクソガキめ。

アーヴィングンやジェネラルオークなど一級モンスターを相手にしていた俺に言うか？

畜生、少年の体が憎い。

そうこいつしている内に近くの草むらが動き、ついでモンスターが飛び出してきた。

相手はワームやビッグアントなど雑魚モンスター。

これといった特殊攻撃も無いので落ち着いて対処すればいいのだ

が、いかんせんこちらは初めての戦い。

クロスも顔がこわばって大剣が震えていた。

仕方ない、ここは経験者である俺が先手を出でや。

「うりやあ

「ふつ

「……ファイアボール」

俺がクロスを案じている間にすでに戦闘は始まっていたようだ。

それにしても内の女性陣は容赦無いなあ。

キッカは喜々としてモンスターに斬りかかり、アイラは冷静にモンスターの目など急所を射抜いている。そして感情の表現の乏しいユキでさえ正確に魔法を詠唱・発動していた。

モンスターも抵抗とばかりに攻撃を仕掛けてくるが俺の作った防具に阻まれてダメージどころか足止めにもなっていない。

「ふつ、口ほどにもないわね」

最後のモンスターを切り捨てたキッカが軽く決めポーズを取った。

「俺の出番はなしですか」

俺は呆れ調子で呟く。

「これならばもつ少し装備を弱くしても大丈夫なのではないだろうかと考えてしまつほど一方的だった。

その後は祭り状態に近かつた。

モンスターを発見すると俺を除く全員が突撃してあつとこつ間に息の根を止める。

それが単体だらうが集団だらうがお構いなしに突撃してあつとこつ間につて狩りまくつた。

「見て見て！『剣』のスキルが5よ。随分上がつたと思わない？」

「私は『弓矢』が6ですけどね」

「何で私よりアイラの方が上なのよー？」

「私の武器はこれですからね、当然です」

「ボウガンは卑怯よー！」

モンスター狩りに一息ついた俺達は持ってきた弁当で昼食を取りていた。

キッカとアイラはお互にレベルについてやつの言ひ合っている。

「本当に彼女達の元気は底なしだなあ」

クロスがそんなことを言つたが、あんな重装備で軽装備の俺達と同様の運動量にも関わらず、息一つ乱さないといつのはどうしてこうしてだ？

「……美味しい」

具が気に入ったのだろう、黙々と弁当を食べるコキ。

その様子は小動物みたいで可愛らしい。

「ほり、これも食べろ」

だから俺は自分の分から一つか二つかをコキに差し出す。

「……くれるの？」

するとコキは田を輝かせて俺に尋ねてきたので「ああ」と答えると。

「……ありがと」

「つて、おい！？」

ありつけどかコキはおかげでなく俺の弁当箱をひったくった。

アハハハハハ

草原に軽やかな笑い声が響いた。

魔物退治（後書き）

次こそがクロスが主人公にお願いする場面です。約束を破つてしまい、申し訳ありませんでした。

魔物退治についてどうして子供達が魔物を相手にできるのか説明が不足していたため追加しました。

「ハニ、ハニ、ハニ、ハニ

「よし、これでノルマの二〇本完成

俺はいつもの通りに薬屋でポーションを作っていた。

「お疲れ～」

薬屋のお姉さんであるティーダさんが、俺が終わったのを見計らつて出てきた。

「やつ言えば今日は友達と一緒にいくつも良いの？」

ティーダさんは俺達が外へ出て魔物の討伐をしていくとは信じていない、だから俺はその問いかけに苦笑して。

「最近は僕抜きで遊んで（戦つて）いるんだよ

最初の数回は全員揃って出ないと街外へ出なかつたが、最近はソロでも行くようになった。

俺はソロで行くのは大変危険だと懸念したのだがそれは杞憂に終わつた。

キッカ、アイラ、ユキそしてクロスは長い間浮浪児としてスラムを生き抜いている。

そのため野生の勘が研ぎ澄まされているのか危険に関しては敏感だ。

先日、苦労しそうなキングワームに遭遇した時も一人で突っ走らずに俺を含めて五人が見事なコンビネーションを發揮して敵を沈めていた。

だから大丈夫だと俺は判断している。

「あらり、はぶられちゃったの？」

「こちらの状況を誤解しているティータさんのセリフに俺は苦笑を深めてしまった。

そして話題を切り替えるためにポーションを渡す。

「はい、これが今日の分」

「いつもいつも御苦労様。ボクの作ったポーションは常連さんからも評判が高いわよ」

ティータさんはいつまでたっても俺をボクと呼んで子供扱いする。それがたまに不愉快だと感じる時があるけど、それを責めてもティータさんは決して改めようとしないことが分かっていたから俺はもう諦めている。

「明日もポーションだけで良い？ 何ならポイズンボトルやパララアイアウトも作るけど」

「お生憎様、そちらは事足りているの」

「残念」

俺は肩を竦める。状態異常回復系はポーションより高く売れるが需要が少ない。

俺がポーションに拘る理由の一つだった。

最も、ティータさんに言わせると。

「状態異常回復系の調合の方が難しいんだけどね」

らしい。

まあ、調合レベル105だった俺から見るとポーションもポイズンボトルも一緒なんだけどな。

「そう言えばボク、結構稼いだんじゃないの？」

「うん、僕は今10000G以上持つているよ」

ポーションは一日30個と決まっているが、たまに予約販出しだと大口取引が三、四回あった。

大口取引一回につき大体ポーション100個ぐらい頼まれるから相当稼いだものだ。

大口取引は契約外として大目に一個40Gで買い取つて貰えたからうちはホクホクだ。

「で、それがどうしたの？」

「ボクって何でお金を集めているの？」

「それは家を持つためだよ」

家を持つことが出来れば大型の調合台や鍛冶場などが創設できるので、これ以上誰かの場所を借りなくて済む。

この調合台もポーション作りのみ認められていて、それ以外の使用は料金を取られていた。それが無料になれば今後の活動がぐっと広まるこことは予想できる。

「ねえ、ボク。提案何だけば、そのお金を担保にして家を手に入れないと？」

「どうこう」と、

「近々郊外に空き家が出来るのよ。で、その家の持ち主は色々なことをやっていたらしくて調合台や鍛冶場は勿論のことキッチンや畠まで完備しているのよ」

「へえ」

俺は感嘆する。もじこの話が真実ならばそれは非常に嬉しいことだ。

俺が家を持つた暁にはそういうものをいづれ作る予定だったから、それが省けて非常に助かる。俺にとっては非常においしい話だが。

「まあその家を見たいのだけど」

「ティータさんが俺を騙すことなんてないが、確認のため聞いておく。

するとティータさんは唇の端を吊り上げて。

「やつと思つたわ、この店が閉店してから向かいましょっ」

閉店になつた時刻に俺は薬屋の前で待機していた。

しばらくするとティータさんが現れる。

「お待たせ、待つた?」

「いや、僕も今来たところだよ」

こゝは社交辞令。

本当に一時間ほど待たされていた。

「ううがわづよ」

馬車で揺りられる」と30分、目的の場所へと辿り着く。

まず始めに俺は立っている場所と紙で示されている場所とを示し合わせて誤りがないことを確認した。何せ他人の家を案内されちゃたまらない。

「ボクつて用心深いわね」

ティータさんが感心と苦笑の入り混じった表情をした。

それはアイラから口を酸っぱくして言われていたからな。

この一一テイルス（一ヶ月）アイラは俺に詐欺師のテクニックについて何度もレクチャーしてくれた。

アイラ曰く俺は騙されやすいのだから、詐欺師がどのようにして人を騙すのか方法ぐらいは知つておきなさい、らしい。

「ほひ……」

俺は感嘆のため息を零す。

中の様相は俺が家を買つたらこいつようかという想像を具現化したようだつたからだ。

ちょっとした屋敷になつており、執事やメイドがいてもおかしくない。

そして外には広い畠もあつて離れには鍛冶場も備え付けられている。

家中を拝見してみる。

一階は大きな広間となつており、ドアを隔てた先には調合台やキッズチンがある。そして一階へ続く階段を上ると、部屋がいくつもある。

「これなら一人ずつ部屋を割り振ることが出来るだろ？。

「これは本当に良い物件だね」

心なしか俺は興奮していた。

「うう」とイーダさんが切り出す。

「で、この家なんだけど、おそれく30000Gで売っちゃうかと思つわ」

「30000か……」

俺は考え込む。

今あるお金がとてもじゃないけど払えない。しかし、この家は絶対に欲しい。

「これは提案何だけど、今のお金じゃボクが家を買えないから、私も一緒に出してあげる。そして20000Gはボクが返してくれれば良いよ」

「え？ どうこう」と。

「だから私が残りの20000Gを払うとこう」と。ボクには結構

お世話になつてゐるからね。これまでの利益を考えるとこれぐらい安いものよ」

ティーラさんは俺の作ったポーションを100Gで販売している。

つまり少なく見積もつても30000Gはあるのだ。

「けど、それは悪い気がする」

「何言つているの、ボクは家が欲しかったのでしょう。あの時、私がから今日の年数を聞いた時から人が変わつたようにお金を集め出したわ」

現在はイルヴァナス歴四五八年。

そして魔物による大進行によつてこのカルギュラスが廃墟となるのが四六三年。

つまり後五年でこの都市は跡形もなくなつてしまつのだ。

それを聞いた瞬間俺は今までの戦略を見直す必要が出てきたと感じた。

本来ならばこの都市を拠点としてゆっくりと力を付けようと考えていたが、それは諦める。

俺は前の住み家だつた工業都市ジグサーに移り住み、そこで力を付ける計画へ変更した。

しかし、工業都市ジグサーの周辺にはここと比べ物にならない

強大な敵が徘徊している。

五人組のパーティーでも平均レベルが30以上必要だりつ。

当然ながら今の俺にその都市へ辿り着くことは不可能。

だから俺は一年以内に家を持ち、そこで各スキルのレベルを上げると並行して自分のレベルを上げることにした。

そのための第一歩として必要だつたのが家だつたのだ。

俺が黙りこんでいるのを見て何を思ったのか、ティータさんは腰を下ろして田線を下げ、俺の肩を掴んで語りかける。

「ボクが何を考えているのかお姉さんに分からぬけど、ボクが焦つてしているのは伝わってきてるよ。一度力を抜いて深呼吸して。ほら、少なくともお姉さんはボクの味方だよ」

俺は我知らず赤面した。

ティータさんは俺の母親に似ている気がする。

そう言えば母さんも今の様な恥ずかしいセリフを真顔で言つていた気がする。

あの時は何とも思わなかつたが、今のように焦つてはいるといふにも嬉しくなる。

そしてティータさんは立ち上がりてニコニと微笑んだ。

「さあ、行きましょう。早くしなこと」の家を誰かに取られてしまつよ」

それを聞いた俺は慌てて先へと進むティーラさんその後を追つた。

数日後、俺は驚かせたいものがあると言つてキッカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを連れ出した。

「ねえ、ビニに行くの」

初めて乗る馬車に戸惑つているのか所在なさげにしているキッカ。

それに俺は「着いたら解る」と笑つた。

そして到着。

「ヒーは何だと思つ?」

俺が四人に聞くと、じばらぐく考え込み、最初にアイラが手を上げた。

「立派な屋敷ですね」

「そつ、立派な屋敷だ。で、これは誰のものだと思つ?」

「ヒーまで言つとアイラをはじめ全員が理解したらしい、目を丸く見開いてありえないといつよつて首を振つた。

「まさかこれは」

「さう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

それを示すかの様に表紙には俺達五人の名前が記されていた。

「そして、ちらにサプライズがある」

俺は隠していた小箱を目の前に持つてくる。

「家を持つたということは社会的地位があるということだ。ビッグことだと思ひへ。」

俺が尋ねると今度はユキが。

「……市民になれる」

「そう、その通り。これが俺達五人の市民証明書だ」

ティータさん用意して貰つた羊皮紙を一人一人に手渡す。

この市民証明書は『市民』になるために必須なものだ。

これで俺のステータスが『浮浪児』から『市民』に昇格できる。

『市民』になると出来ることがグッと広まる。

病院で診てもらえたし、図書館も利用できる。政治にも関わることが出来る。

そして何より俺は自分で作った物を自分で売ることが出来るのだ。

何せ『市民』だから。

人間と認められた証だから闇の者もおいそれと手出しが出来ない。

つまり、遠慮なく商売が出来る。

あ、もちろん薬だけはティータさんのお所で売るよ。

そうするのが礼儀といつものだらう。

はい、感傷終わり。

「さてと、入るわ。俺達の城」

「待つて下さー！」

俺がそう宣言して一歩踏み出そうとした時、突然クロスが大声を出した。

俺はつんめのつてしまつ。

「これさえあれば自分達は市民なんですね

「まあ、そうなるけど」

ぶつけてしまつた鼻頭を押さえながら俺は答える。

すごく痛いし、それ以上に恥ずかしいぞ。キッカモクスクスと笑つてゐるし。

「学校にも通えるんですね」

「市民だから当然の権利だな」

「だったら、お願ひします！」

クロスは両膝をついて地に頭を擦りつけ始めた。

この出来事には俺を含めて全員が驚く。

「自分達を学校へ通わせて下さい！」

そしてクロスは思いの丈を語り始めた。

「僕は昔から騎士に憧れていきました。将来は騎士となつて国を守りたいと考えてきました。けれど僕は市民権を持たない浮浪児です。騎士になるための試験など受けることが出来ません！」

普段は温厚なクロスがここまで熱く語るとは。

よほど騎士への思いがあるに違いない。

さて、どうしよう。

学校へ通うとなるならばそれだけお金が必要となる。しかも騎士の養成学校となればなおさらだ。どれだけ低く見積もつて通常に三

倍はかかるだろ。

「けど、まあ良いか」

あのクロスが血口主張しているんだ。

普段から我がままを言わないことを鑑みればそれぐらい良いだろう。

幸いにも『市民』になったから金策のあてはあるし。

「分かった、学費は俺が何とかしよう。だからまずは学校に行つてくれれば良い」

俺はいつも立ち上がりせようとしたがクロスは頑として動こうとしない。何故かと燻しんでいたとわざと葉を紡いだ。

「僕だけじゃないんです。キッカやアイラ、そしてコキも一緒にお願いします」

「ぐ、クロスー!？」

「何を言つて居るのですか!?」

「……」

それにはさすがにキッカとアイラ、そしてコキが反応した。

「キッカは冒険者に、アイラはレンジャーにそしてコキは魔法使いになりたいのです。ですから、僕だけでなく彼女達も一緒にお願ひ

します！」

「ふむ、それは本当か？」

俺がジロリと視線を向けると、3人はバツが悪そうな顔をするが、イイエとは答えなかつた。つまり彼女達は学校に通いたいのだろう。

「しかし、まあ揃いも揃つて学費が高い所ばかり」

どれもこれも全部学費が通常の学校と比べて高い。

そして最も高いのが、ユキが希望する魔法使いのための学校で、これは通常の学校の学費の五倍はする。

4人全員にかかる学費を合わせると、通常の学校に14人送り込めるほどの莫大な金額が掛かる。

これはさすがの俺も躊躇してしまう。

この家も一萬Gの借金があるし。

俺は四人を見ながら思案する。

果たして四人にそれだけの投資をする価値があるのかどうか。

それらの学校では良い教育を受けられるから、もし四人全員が付いてくれるのならば工業都市ジグサークまでへの道のりは楽になるだろ？。

ジグサークさえ辿り着ければ何とかなるから俺についてくるなり

別れるなり好きにして貰つても構わない。

しかし、それはあくまで順調に事が進んだ場合だ。

もし俺に何かあれば学費の支払いは不可能になり、彼らは学校を辞めてもらうしかない。そうなれば今までの投資も水泡に帰してしまつ。

逆に彼らが問題を起こしてしまっても水泡に帰す。

ここは重要な分岐点となる。

学校に行かせるか否か。

投資をするか否か。

考え、考える。

キッカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを順に眺めながら俺はどうするか思考をフル回転させる。

20分ほど経ったのだろうか。

その間誰一人声を出さなかつた。

その様子を見て俺は四人の覚悟を知つた。

俺はそう口ずさんだ。

誰かが言つたのかを忘れたが、とても良い言葉だった氣がする。

よく考えると俺は現実世界でも田の前の彼らの様な友人もいなかつたし、将来はこうなりたいと考えることも無かつた。

ただ、ゲームをしてさえできれば何も要らなかつた。

だからこそ俺は彼らが眩しく映る。

俺に持つていらない何かを持つてゐるキツカ、アイラ、ユキそしてクロスが羨ましい。

「良いだろ？　

俺は呟く。

「そこまでやりたい」とがあるのなら、全てを出し切れ」

「では

クロスが目を輝かせたので、俺は深く頷いて。

「自分が望むままにやつていい

「……あ、ありがと」「やれこれます」「」「

四人全員が感激した面持ちで同時に頭を下げてきた。

「さてと、」これからが大変だぞ。お前達は字が読めるか。それが出来ないと話にもならん。だから明日から特訓だ」

俺は照れくさかったので踵を返し、」これからじばりくお世話をねるであらう家に歩を進めた。

柄にもない」と言つたと自覚している。

今の俺はきっと変な顔をしているだろう。

」のまま何事もなく自室に閉じこもつて暴れたい衝動に囚われて集中力が疎かになつた結果。

「大好きーー！」

「必ず応えます」

「……一生忘れない」

「あつがとうござりますーー！」

「 おわあーー！」

キッカ、アイラ、ユキそしてクロスから抱き付かれてもみくちゃにされた。

目標達成（後書き）

予告通りクロスが主人公にお願いしました。

けど、失敗した感が否めません。

慣れなことはするものではないと痛感しました。

これで第一部は終了です。

無一文から家を持つまでの流れでしたが、流れが速過ぎたのではないかと反省しております。

第一章に入る前に番外編としてアイラ視点でこれまでの流れを紹介したいと考えています。

番外編 アイラの視点（前書き）

番外編です。

ですので読まなくとも小説の流れに差し支えはありません。

主人公が拾った四人組の一人であるアイラ視点で第一話から第五話まで進みます。

アイラが主人公の活躍を見てどのように感じたのかを想像して頂けると幸いです。

番外編 アイラの視点

『市民』になること。

それは私を含めた全浮浪児が持つ願いであり叶わない夢であった。

私、アイラは親の顔を覚えていない。

物心ついた時には既に浮浪児としてそのままの田やその田を生き抜くのに必死だった。

ましてや私は女の子。

一人だと喰われて終わり。

だから生きるための知恵として私は仲間を組んでいた。

思い切りは良いけど猪突猛進なキッカ。

天然不思議系のマスクットキャラクターであるコキ。

気は弱いけど力と体格は規格外のクロス。

そして常に周囲の気を配つて策謀を張り巡らせる私。

「」の四人で徒党を組んで過「」していた。

盗みは日常茶飯事、詐欺や置き引きも普通にやっていた。

基本的に計画の立案は私で実行するのがキッカ。

たまに他の浮浪児グループと一触即発状態になつた時はクロスの出番。

あいつは気が弱いけど力が強いから大抵の浮浪児は彼一人でどうにかなる。

ユキは……何でいるのか私も分からないわね。

いつの間にか私達の仲間に加わっており、気が付けば行動と共にしていたみたい。

邪魔にならないようだからチームのマスコットとして置いている。

それだけ。

それだけのはずだったのに、ユキがあいつを見付けてきたのは驚いたわ。

ユキは珍しくパンの入った袋という戦利品を手中にして戻つて来たとき、私はパンの持ち主について興味を持った。

このパンは浮浪者専用のパン屋でしょう。

ならば必然的に持ち主は市民証を持っていない浮浪者ということ

になるわね。

ユキが言つには「このパンを一人で持つていたという。

この量のパンを一人で？ 仲間もいないのに？

少なくともただの浮浪者じゃない。

身元の知れないユキにあっさりとパンを奪われたことも相まって私は会つてみたいと感じた。

よほどの大馬鹿者かそれとも……

「提案があります」

久しぶりのまともな食事ではしゃいでいる二人に向かつて私はある考えを披露した。

結論的に言えば、ユキといつ少年は想像以上だった。

あの時の「私達を買って下さい」発言は吊り橋を田隠しで渡るぐらい危険な賭けだつたけど、その分見合つた報酬　きれいな服とお金手に入れたわ。

今、ユウキはベッドで熟睡している。

私達にきれいな服を作ってくれたのと、コウキはボロの服を着ているのは多分自分の分の服を作り忘れたのだろう。

可愛いといひあるじやない。

「コウキはしばらべられるだけのお金置いてくれたから、私はここから逃げ出さうかと提案したけど反対多数で却下となつた。

いつもは賛成してくれるキッカガ反対するとは珍しい。よほどコウキが作った服に感動したのね。

私の考えは却下されたけど、不思議と腹は立つていなかつた。

それは無意識の部分で彼について行つたほうが良いと訴えているのかもしれない。

まあ、今すぐに離れる必要はないわ。

幸いにも明口は貰つたお金で色々と遊べるから思いつきに楽しもうかしい。

その途中で他のグループと会つたらどうつかな。

洋服を着てお金を持っている私を見た彼らは笑つて悔しがるだらうな。

思いつきに楽しむのがいいね。

……自慢した結果、私は毎日服や靴をスマム街の入口に置く約束をさせられたわ。

「どうやら舞い上がってたみたい、反省しなくていい。」

そして、驚いたことにコウキは毎日服や靴を作ることを快諾したのよ。

「え、良かったのよ。」

でないと私達のグループは全浮浪児の敵になつていていたから。

ありがとうございました、コウキ。

「どうやらコウキは私達を驚かせるのが大好きなようね。」

「いつたいどこの世界に銅貨や金属://から武器防具を作る浮浪児がいるのか。」

Bの銅貨と鋸びた水道管から青銅の盾を製造したのも十分驚いたけど、鋼の大剣まで作つてくるとは私の常識の範疇を超えていた。

確かに、鋼の大剣を作る設備が鍛冶屋にあるとはいえる（王都だから）限界というものがあるでしょう。「ここまで運んできた鍛冶屋の若い職人が呆然としていましたよ。『俺つてまだまだ井の中の蛙だったんだなあ』とブツブツ呟きながら帰つていったわ。」

コウキはそれどころじゃないくらい疲労してベッドに倒れたから

知らないでしょ、うけどね。

それに、鋼の大剣を普通に買おうとすれば一千Gは下らないわよ。

どうやってそれを一個五百以下の屑鉄から製造できるの？

ユウキに尋ねると「俺はもつとすげー武器を作っていた」と、冗談なのか本当なのか判断に悩むセリフを吐いたわ。

「い、やー、た、す、け、て、！」

キッカが叫んでいるけどこればかりはどうしようもないわ。

だつて勉強しないキッカが悪いんですから。

知恵を働かすには知識が必要。

知識を蓄える」ことを怠れば芳しくない結果が待っているわ。

さて、私達は外で飲み物でも飲みながら一服しましょうか。

鬼の居ぬ間に洗たく。

ユウキがキッカに構っている間は存分に休めるわ。

キッカの要望通りユウキは全員分の装備を作ってきた。

キッカは当然のことだけクロスも重装備に身を固めて満更じやなさそうだったわ。

そう言えばクロスは最近騎士になりたいとか呟いていたわね。

浮浪兒だったあの頃はそんなことを言わなかつたけど、やはり衣食住が安定すると夢を追いたくなるのかしら。

キッカも前よりまして行動力が上がつていたわね。

前々から底なしのエネルギーの持ち主だったけど、近頃は輪をかけてその傾向が強いわ。

あんなにも快活で活き活きとしたキッカなんてしばりく見てなかつた気がするわね。

そして、ユキに魔法の才能があることは素直に驚いた。

ユキは前々からユウキと何をしているのか分からなかつたけど、どうやら魔法を教えられていたらしいわね。

後でユウキにそのことを追及するとユウキは「ユキが黙つておいてくれと言つから」とユキが口止めしていくみたい。

あの子にも誰かを驚かせたいと思つ所があつたよつね。

まあ、そんな私も首を齊かせよつと密かにユウキからボウガンの扱い方を学んでいたけど。

けど、その驚きの半分はユキに取られちやつた。

少し悔しいわ。

後でお礼として詐欺師が使う人の騙し方について教えてあげるけど、少々厳しめにレクチャーしようかしら。

ユウキがブチ切れる可能性があるけど、しばらく一緒に暮らしたからある程度怒りの境界線は判断できるわ。

ふふ、こんなところで浮浪児だった経験が役に立つとは思わなかつた。

今日も私は一人で魔物を狩る。

始めの内は四人揃つてから魔物を狩つていたけど、段々とそれがじれったくなつたので各自がバラバラに行動しようと提案したのよ。

ユウキは「それは危険だと」難色を示していたけど、私から言わせればスラムより百倍安全だわ。

武器もあるしポーションも持つてているからそいつ大事にならないわよ。

スラムで培つた危険を察知する能力を舐めないでちょうだい。

そういうつた説得の結果、渋々ながらもユウキは単独行動を認めて

くれるよくなつたわ。

私は街の外にある森に身を隠し、気配を絶つてあるポイントに魔物が来るまで待ち続ける。

そして、魔物がそのポイントに入つた瞬間に矢を放つ。

ユウキの作ったボウガンの糸は鋼糸を使用しているので、通常のより何倍も強い。

至近距離ならばベアー程度の頭蓋骨を貫通する程よ。

全く、本当に危険な代物を作つてくるわね。

急所を貫かれて絶命した魔物を確認した私は愛用のボウガンをツンと叩いた。

「あら?」

私は肉が焦げる匂いが漂つてきたのを感じた。

「どうやらユキもやつてこようつね」

ユキも積極的に狩りを行つてゐるわ。

順番でいうとキッカ>私>ユキ>クロス>ユウキね。

ユウキはポーション作りがあるから仕方ないにしても、クロスはもうちょっと頑張れないかしら。

あれだけの重装備に身を固めているならばちよつとやそつとのことで死なないから思いつきり戦つても問題ないはずなのに。

私はクロスの臆病さは騎士としてやつていけるのか憂いた。

「うと、今はそれよりもユキね」

ユキは魔法使いなので、私達より打たれ弱い。

万が一があつたら困るので私は様子を見に行くことにしましょう。

誤解の無いように言つておくとポーションのための材料は日替わりローテーションで個人個人が集めてコウキに渡しているわ。

さすがに材料集めを行わないほど私達は恩知らずでないと自覚しているわよ。

どうやら私も三人に感化されたようね。

ユウキがいない時に私達が集まると、決まって話すのが将来についてだつたわ。

どうも私は隠密行動を好む傾向があるから、将来はレンジャーとして活躍したいわ。

キッカは冒険家、ユキは魔法使いでクロスは騎士。

ちょっと前の自分達が今の私達を見たら絶対驚くわね。

そして、キッカは魔物狩りをこの辺だけではなく、隣街の周辺にまで足を伸ばしたいみたい。

けど、そこまで行つても私達は浮浪児だから通行証がない。

通行証があれば一度自分が行つた街だと一瞬で行ける装置が使えるのだけど、市民しか貰えない。

ユウキがいってくれれば問題ないのだけど、生憎とユウキはポンヨン作りで忙しい。そしてユウキ抜きで外で一泊できる程私達は自惚れていなーいわ。

そして、魔物狩り以上に私達は独学の限界を感じ始めていたわ。

もちろんユウキが教えてくれるのだけど、ユウキは体一つしかなく、食い扶持を稼ぐために私達に構つてあげる時間がない。

私達が満足するまで教えてくれる場所は学校にしかなかつた。

私が行きたいのは『など隠密行動を中心とするレンジャー育成学校。

これはレンジャーの登竜門と呼ばれるほど徹底的に教える学校。

これ出れば私の夢へまた一つ近づく。

けれど問題が一つ。

学校に通えるのは一部を除いて市民以上の称号を持つ者のみ。

残念ながら私達は市民じゃないので学校に通えないわ。

もしかしたらコウキなら何とかしてくれる。

一瞬その思考が頭によぎつたけどすぐ打ち消したわ。

おそれく頭もコウキに頼むという選択肢についてはあつたのかも
しれないけど、誰も言ひ出せないでしょうね。

何せコウキには非常にお世話になっているわ。

私達四人を養うために毎日ポーションを作り、暇を持て余した私
達に武器や防具、そして戦い方まで教えてくれる。

そして最も凄いのが、それらのことに関してコウキは全く文句を
言わずに平然としていることよ。

私ならコウキの様な対応は無理だと断言できるわ。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

……もしかして私はとんでもない人物に会ったのかもしれない。

ユウキは買った屋敷の前で得意げにしているけど、普通の常識で考えて十一歳の子供が家を持つことなんてあり得ないのよ。

今更ながらにあの時の選択について考えると寒気がするわね。

もし、あの時パンの持ち主に興味を持たなかつたら。

金貨を貰つて引き下がつていれば少なくとも私は今この場にいなかつた。

全く、匂いすら感じさせずに通り過ぎ去る。

本当にチャンスといつものば分からなこものね。

あら？ まだ何かあるのかしら。

ユウキが小箱を持つてこちらへ向かってきます。

そしてそれを目の前で開け、入っていた物は。

「そう、これが市民証明書だ」

もう説明は不可能ね。

私が。いえ、私達があんなにも望んでいた物が目の前に出ってきたのだから。

本当にユウキは何者なの？

今なら私はユウキが神様だといつても「ああ、やっぱり」と納得

するでしょ'うね。

そんなユウキは氣を良くして屋敷へと向かつ。

と、レジドアクシデントが起こつたわ。

普段は物静かなクロスが大声でユウキを引き留めたのよ。

ユウキがつんめのつて扱ける様は失礼だけど笑つてしまつたわ。

「ふむ、それは本当か？」

普段とは全然違つユウキの氣迫に私は生きた心地がしなかつたわ。

「ユウキ、あんな田もできたのね。

まあ、あれだけの力量を持つていればたかが浮浪児ぐらに黙らせ
るもの訳ないわね。

およそ二十分の間ずっと黙っていたけど、私の人生の中でこれほ
どの威圧を経験したことはなかつたわ。

たつた一言、「学校に行かない」と言えば良かつたのかもしけな
いけど、それは言えなかつた。

田の前のユウキから発する『恐怖』よりも『願望』の方が強かつ
たのよ。

それは躊躇^{ちよ}だ。

だからこそ、誰も言葉を発せなかつたのよ。

「Be ambitious 大志を抱け」

ユウキが呟きました。よく聞き取れませんでしたが、ユウキは一つの決心をしたようです。私達は息を殺して次の言葉を待つたわ。

「良いだろ?」

その瞬間、周りの空気がふつと軽くなつたわ。

クロスも「では」と言葉を紡げていたから、それは錯覚じゃない。

「自分が望むままにやつてー!」

ユウキはそう紡いだ後、ふと微笑みました。

その笑みは遠い記憶の中の顔も知らない両親を彷彿させるような慈愛の表情。

「「「「あ、ありがとうございます」「」」」

いつの間にか私達は自然と、心から頭を下げていたわ。

よく師匠に弟子が頭を下げる場合があるけど、その時の弟子の心境がようやく理解できたかもしれないわね。

敵わないのよ。

自分のためにこれほど多大な労力と時間を割いてくれる存在がありがたすぎて何も言えない。

だから私はこのままユウキ、いえ、ユウキ様がいなくなるまで頭を下げようと考えていたけど隣のキッカが震えだし、そして突然奇声を上げてユウキ様に突撃し出したわ。

よく見るとユキやクロスも駆け出している。

これは遅れるわけにはいかないわ。

「ユウキ様」めんなさい。

最後のわがままです。

感謝の気持ちを表現させて下さい。

「必ず（ユウキ様の）期待に」応えます

その後の私達は学園の筆記試験のためにユウキ様自らが字の読み書きについて教えてくれました。

これ以上コウキ様のお手を煩わせたくないという想いは全員が共通していたようで、あのコキでさえ眞面目に勉強していたわ。

その甲斐あつてか私達全員が試験に合格。来ティルスの入学式に参加できるようになつたわね。

しかし、最難関と呼ばれた王立魔法養成学校にコキが合格できるとは予想できなかつたわ。

噂によるとコキが唯一の市民だとか。

いつの間にか私達の仲間に入ってきたことといい、コウキ様を見つけてきたことといい本当にコキは何者かしら。

「もう準備はできたか？」

コウキ様が私の荷造りについて心配してお声を掛けてくれました。

私達が通う学校は全寮制で寄宿舎暮らしです。

そのため昨日は全員で下着や制服の素材やらを貰って出かけ、コウキ様が徹夜で全て仕上げてくれました。

「はい、もう少しです」

私は努めて平静に答えます。

本当はコキのことを考えて全然進んでいない」とは口が裂けても言えません。

ああ、そうだ。約束を忘れていたわ。

「申し訳ありませんがユウキ様、少々時間を預けませんか？」

「そう言つてもそれそろ馬車が来るだ？」

「はい、承知しております。しかし、これから先しばらくキッカ達と会えなくなりますから最後に言葉を交わしたいのです」

「ああ、そうこうとか。それなら仕方ないな」

「ユウキ様は一つ頷いてこの場を去つていきます。ありがとうございます、ユウキ様。

大急ぎで荷造りを終えた私は集合場所へ向かつたわ。

その場所は屋敷の裏側にポツンと生えた木。

「急いで急いでアイラー」

「……遅い」

「転ばないよつ氣を付けて」

「どうやら私が最後のよう、本当に恥ずかしい。

さてと、氣を取り直して私は木の前で円陣を組みました。

これから先はしばらく会えない。

だからこそ、最後に皆の心を合わせるために田陣を組もうとした提案をしたわ。

ここが第一の人生。

ユウキ様の目となり手となり、そして足となつて動くための生活が始まること。

キッカやユキ、そしてクロスの様子を確認すると皆固い意志を瞳に宿していた。

うん、満足。

私だけじゃないみたい。

全員でユウキ様を守り抜く決意が満ち溢れている。

まず始めにキッカから。

「私達は」

「――心同体」

次にユキ。

「……最後まで」

「信じぬく」

クロス。

「後悔せ」

「「「「あつえない」」」」

最後に私は。

「この命を誰に捧げる」

「「「「ユウキのため」」」」

番外編 アイラの視点（後書き）

稚拙な駄文を最後までお読み頂きありがとうございました。

普段の生活（前書き）

大幅変更しました。

普段の生活

14歳になつた俺は以前と比べて大分力が付いた様に思える。

身長も伸びたしやれることも増えた。

だが、俺の心は未だにあの時から動こうどしない。

ベッドに寝ていた俺は何となくステータスwindowを開いてみる。

名前、装備、スキルなどが並んでいる枠の中に一つだけ空白が存在していた。

「やはりログアウトできないか」

その項目は夢から覚めるための必須場所。

それが無いといつとは、覚めない夢と同じじ」と。

覚めない夢＝現実と置き換えることはできると考える。

つまり俺はこの世界は仮想空間でなく、現実ではないのかと疑い始めていた。

いくらゲームが好きな俺とはいえ一年以上ゲームの世界に漫ることなど出来やしない。

精神はともかく体がもたないので。

だが、今のところ俺の体に変調はない。

つまり体は元気そのものだということになる。

「この世界は妙に現実感があるんだよな」

ゲームの世界ではありえなかつた空腹や病気などの異変。

現実ではありえないステータスワインディングの出現。

「……胡蝶の夢」

俺は何ともなしに呟く。

胡蝶の夢とは中国の莊子の偉人が思想であり、ここが現実か否かを論ずることよりも蝶なら蝶で、皇帝なら皇帝でその場を精いっぱい生きれば良いということを説いていた。

次に俺は自分のステータスを確認する

名前：	コウキ=カザクラ
装備：	武器 ミスリルダガー
防具	風のマント
頭	ミスリルヘルム
足	軽業師の靴
装飾品	厚手の手袋
お金	54600G
ステータス	

剣	35
---	----

魔法	20
採取	25
料理	5
鍛冶	45
調合	56
裁縫	43

アイラ達と別れてからもう2年が過ぎ、昔と比べて相当スキルが上がった。

特に鍛冶や調合等はもうそれで食べていけるレベルだ。

「あいつらの学費を稼ぐために相当頑張ったからなあ

俺は過去を振り返る。

4人が学園に向かった最初の一年は特に忙しかった。

入学金やら学費の支払いやらでお金がどんどん飛んでいく。

必要な金を稼ぎ出すために俺はポーションのほかに武器や防具を作つて売つていた。

始めは正体を隠すつもりだったがもうそんなことを言つていられる状況じゃない。

これまで封じていた露天商まで行つて金を稼ぎ出さなければならなかつた。

幸いにも露天商を行つていた期間で闇の者が絡んでくることは無

くてホッとする。

半年ぐらい続けると俺の作った物は出来が良いと評判が出来て、次第には俺の家まで押しかけて来る冒険者が現れる始末。

商売も軌道に乗つてとりあえずは金の心配はなくなったのが1年前。

今はわざわざ売りに行かなくとも待つていれば客が来る状態だ。

だから俺はボーッとしていて良い

していて良い……はずなんだけど。

「ここまで寝ていろのですかこの急け者が」

罵声とともに俺は文字通りベッドから吊り起しされた。

「やつをと起きなさい。今日の分の仕事は山のようにあるのですよ」

「エルファさん、一応俺は主だよ？」

俺が涙目で抗議するがエルファさんは素知らぬ顔をしてそれをベッドメイキングに取り掛かっていた。

俺を罵倒するのは最近雇つたメイドさんのエルファ＝ララフルだ。

年は17歳前後。きめ細かい白磁の肌と鮮やかな緑色が映えた腰までの長い髪と瞳が印象的な少女。例えるならフランス人形、ただそこに佇んでいても絵になる美しさを秘めていた。

しかし、エルファさんは謎が多くすぎる。

名前：エルファ＝ララフル
装備：武器 アサシンダガー

防具 メイド服
頭 カチューシャ
足 ニーソックス
装飾品 薄手の手袋

ステータス

小剣 85

隠密 69

料理 75

裁縫 56

音楽 65

鑑定 75

「……一体何だこれは？」

顔合わせした際にエルファさんのステータスを見せてもらつた感想がこれ。

どれもこれも高レベルだが、いかんせん方向性が色々とおかしい。

隠密ってなんだ？ どうしてそんな特殊スキルがここまでレベルになつてている？

小剣と隠密がここまで高くなるのに思い当たる職種が一つあるが、それはあまり考えたくない。

何故ならそれはアサシ

「主、せつせとして下さー」

エルファの催促に俺をぎくじしながらも頷く。

まあ、人の過去など詮索しても仕方ないからここは聞かないでおくのが正しいか。

本人が言いたくなったら話すだろうと俺は考えている。

そのステータスから想像できる通り、食事も掃除も文句の付けようはないが、主を主とも思わない言動が玉に傷の、扱い難い困った人だった。

本人いわく、ちゃんと主らしく振舞えばこちらも誠意ある対応を取るらしいが、エルファが納得する主の振舞い方とは一体何だろう。

前に聞いてみると。

「人に聞く時点で主失格です」

……一言で切って落とされた。

「言っておくが俺にM属性はない、貶されて喜ぶという特殊な性癖は持っていないぞ。

どうしてエルファさんがないことにいるのか。それは2年前に遡る。

俺は4人を見送った後、屋敷が広すぎてとても1人では管理出来ないと悟った俺は誰かを雇うことにした。

そのことをポツリとティーラさんに漏らすと「じゃあ良い人を知つているわよ」と人を紹介された。

ティーラさんの紹介なら何かと大丈夫だろつと判断した俺はろくに面接もせずに採用した。

しかし、それが運の尽き。

『存じの通りエルファさんは俺に対して人間扱いしてくれません。

ティーラさんは「愛情表現よ」と笑っていましたが、どこの世界に愛情をサドな言動で表現する輩がいますか。

「なにボサッとしているんですか、朝飯が冷めるからさつさと起きてください」

はい、分かりました。すぐに下へ向かいますから毛布でバサバサしないで下さい。

俺は高速で着替えた後、逃げるよう下の食堂へ向かった。

食堂には人20人が座れるほど巨大な長テーブルが置かれている。で、入口から見て最も遠い上座の位置に俺の朝食が用意されていた。

パンに牛乳、季節のサラダやベーコンエッグで、デザート付きなど、普通の水準から見れば豪華な部類に入る料理が並んでいた。

俺はまだ湯気を立てているパンを齧つてみる。

パンは出来立てからじく口に含んだ瞬間にほつゝとした。

「うん、美味しい」

食堂は清潔が行き届いており、敷いてあるテーブルクロスも皺一つなかつた。

綺麗なことは綺麗だが、アイロンもない時代にビリヤッテ皺を伸ばしているのか。

「失礼します」

その方法について頭を悩ませているとエルファさんが手にある物を抱えて食堂に入ってきた。

「何を聞きますか」

エルファさんはバイオリンを肩に乗せて俺にリクエストしてくる。

「やうだなあ、少し明るい感じで」

「了解しました」

俺の意向を聞いたのか、エルファさんが知っている中で楽しめの

ポップな旋律がバイオリンから響いてくる。

その演奏はとてもアマチュアとは思えないほどレベルが高い。

「しかし、まあ」

俺は演奏に集中しているエルファさんを眺めながら考える。

確かに言動は最悪だが、それを補つて余りある程の長所を彼女は有している。

俺がエルファさんをここに置いている理由もそれだ。

料理も美味しく、掃除も行き届いてかつ演奏を楽しめるのでれば多少の言動ぐらいは我慢してやるわ。

「次は悲しめの曲で

そろそろ終わりそうだったので俺は新たなリクエストをエルファさんに注文した。

「師匠、おはようござります」

朝食も食べ終わり、紅茶を飲んでいるとその声と共に食堂に入ってくる人影。

親のお下がりなのか頑丈なつなぎ服に身を纏っている。しかし、それによつて美しさが失われることはない容貌を持っているのは。

「ああ、サラか。おはよう」

俺がそう微笑みかけるとサラは恐縮したのかペコリと頭を下げた。

俺より頭一つ分高い身長と大人びた物腰ゆえに見た目20歳実年齢14歳という年齢詐欺を犯しているサラ＝キュリアス。親が職人で、幼い頃からの手伝いをしているせいか作業しやすいようにレンガ色のくすんだ髪を肩口で揃えており、体も同年代の女子と比べるとやや筋肉質だった。

「師匠、今日は武器を作るんですね」

田をキラキラさせて尋ねてくるサラに俺は苦笑して肯定する。

サラは俺のことを師匠と呼ぶ。

サラ曰く、鍛冶屋である親の所に、武器の修理に訪れた冒険者がその武器を絶賛していたので、冒険者に頼んで試しにそれを奮つてみると雷にしびれた様な衝撃を受けたそうだ。

あれほどきめ細かい出来栄えなのに実践重視で作られている。形式美と機能美を兼ね備えたあの武器を作ったのは一体誰なのかを知りたくて探つた結果、俺の家に辿り着いたらしい。

「師匠、見学しますから」

サラは俺と同レベルの鍛冶職人になりたいそうだ。しかしながら女性で職人とは厳しい道を選んだものかと感嘆する。

鍛冶職人の中の暗黙のルールとして子供はともかく鍛冶場に女を入れないというのがある。よく分からぬがそういう決まりがあるから、彼女が鍛冶職人として生きていくのは厳しいだろうと俺は考えていた。

が、ドエスのエルファ曰く、常識無視の塊である主の弟子が職人達から村八分にされるわけがない、例え敵に回したとしても、あんたの腕前なら例え前人未到の場所でも武器を求めて買いに来る客が後を絶たないとえらく捻くれた褒め言葉を頂いた。

俺から言わせるとエルファさんが常識無視なんだけど。

小剣レベル85つて一体何？

閑話休題

実際問題として職人達から嫌われたとしても、サラが後悔せずに生きていけるんだつたらそれで良い。

そう結論づけて俺はこれ以上考えるのを止めた。

「師匠、何の武器を作るのですか？」

離れた竈に向かつて共に歩いているとサラがウキウキした様子で聞いてくる。

「鋼の剣に風属性である『風の石』を付加させてカマイタチを飛ばせる『風の剣』を作ろ」と思つ

一般的に武器は鍛冶屋によって性能が若干異なるが、それでも俺の域までには及ばないだろう。鍛冶レベルが低かつた頃にも同じ材料で重さや切れ味が数段上なのをいくつも作っていたが、鍛冶レベルが20を超えると俺は本格的に独自路線を歩み始めた。

簡潔に言つと武器に属性を付く。

常に高熱を発する槍や帶電している斧などをつけて売っていた

俺の武器は既存の概念をひっくり返すほどの衝撃を与えたたらしく、鍛冶職人の間では俺のことを鍛冶職人の始祖であるメテルギウスの生まれ変わりと持て囃された。

まあ、呼び方なんてどうでもいいので、俺のことをなんて呼ぶかは自由に任せている。

とにかく、俺は武器に属性を組み込める唯一の鍛冶職人として評判を得ていた。

そう、俺は武器に属性を付かせるという困難な技術を習得している。

経験がある今でこそ簡単に出来るが、ログアウトが可能なブレイヤーの時は難しかった。

属性付与は豪快な腕力と纖細な技術の2つが必須である。

その相反するものを両立させるにどれだけ困難か。

繰り返される失敗に心が折れかけたことは一度や二度でない。

さうに付与される属性を増やすとさうに難易度が上がる。

『火』『水』『風』『雷』『土』『闇』『光』7種類全ての属性付与ができたときは「冗談抜きで死んでもいいと思った。

鍛冶に関しては俺と肩を並べるプレイヤーはいなかつた。

つまりす」いわけ。

だから、そりゃ。

「師匠、一つの属性付『なんて言わずにもう』、3個属性を付け加えましょ。私は『風』と『雷』を付け加えた『風雷の剣』を作れますから」

出会つてから一年にも満たないのにここまで出来るのは天才通り越して異常だぞ。

サラ曰く、師匠のやうな口を真似ているだけですからすぐに覚えられたのであって、もし独学なら一つの属性付与さえ無理ですよ。と言っているが鍛冶は見て出来るものでなく、経験が重要なのだから、やはりサラは天性の何かを持っている。

だつてステータスが。

名前： サラ＝キュリアス

装備：

武器 なし

防具 丈夫なツナギ

頭 なし

足 火モグラのブーツ

装飾品 力の指輪

ステータス

鍛冶 105

そのステータスを見たとき俺は目を疑つたよ。

ハンマーすら握ったこともないサラが鍛冶レベル3桁。

しかもそれ以外は全く使えない。

難しい剣の製造方法は一発で理解できる癖に、本を読むとなると
どれだけ優しくとも3行で眠つてしまつ。

エルファさんは別の意味で驚いた。

「それもいいが生憎と材料がない。だから今日はこれで我慢してほしい」

「えー、何で材料が無いんですか？」

「キッカ達の試験が近いからな素材を取りに行く余裕がないんだ」

最初の1年はともかく、2年目に入るとキッカ達も学校に慣れて
きたのか4人は冒険に出かけて魔物を倒し、その際のドロップアイテ

テムを俺に届けるようになつてきた。

俺としては素材が格安で手に入り、キッカ達は小遣い稼ぎそして学費返済と双方ともに利益があるので結構長い間続いている。

「一応キッカ達の名誉のために言つておくが、この風の石は市場に出回らない非売品だぞ」

一般に流通しているのを市販品なら、闇市や冒険者から直接買わないと手に入らない素材が非売品である。

で、属性付与させるための素材の大半が非売品だからキッカ達の存在がどれだけありがたいか。

いやいや、本当にキッカ達を拾つて良かつたと思つ。

「はい、わかりました」

俺の言つていることが通じたのか、しぶしぶながらも引き下がつてくれるサラ。

もつと強くなりたいという向上心は称賛に値するが、感情をストレートに出すことでも少し抑えてくれないものだろうか。

まあ、そこそこは壁にぶつかれば改善するかと思つていい。やはり人間には挫折というのが必要だということかな。

そして俺は頭を切り替えて原材料の鉄鉱石と風の石を手元に並べる。

どのように配分すれば出来上がりの剣に風を付与できるのか、俺はゲーム内の記憶にある精製法を引っ張り上げた。

「うん。よし、これでいいか

頭の中で一通りまとった俺はハンマーを持つ。

「サラも近くで見ておけよ。こういふのは基礎だから反復させて損はない」

サラが頷き、真剣に見ているのを気配で感じた俺は灼熱に溶けた鉄鉱石を打つた。

カーンっ！　っと、小気味の良い音が辺りに響いた。

武器の生成は一日に一本。

今回は単純に『属性だけ付』するので一時間あれば完成するが、もし全ての属性を付与するとなれば今日だけでは間に合わない。少なくとも明日までかかる。

サラの体力上まだ5つは厳しいだろう、と、なればそこがサラにとっては壁になるかな。

俺はそんなことを考えながら、完成したばかりの『風の剣』を振つてみる。

軽く振つたつもりだったのだが、発生したカマイタチは一般的魔術師が放つウインドと同威力だった。

「ほり、振つてみろ」

サラが試し切りしたそつだつたので渡す。

「さすが師匠、私が作ったのと比べても段違いに強いし軽いです」

するとサラは大喜びでカマイタチをあちこちに放った。

サラの実家は鍛冶屋のためたまに俺から材料を貰つて作ることがある。完成品を俺に見せてくれるのだが、いかんせんまだ俺の領域にまで達していないとみる。

「まだまだサラには負けないつもりだ」

サラが放つカマイタチを避けながら俺はそつ言い放つ。

「さすが師匠です。これだから越えがいがあります」

剣を俺に返しながらサラは喜色と闘志を混ぜ合わせた感情を瞳に浮かべてニッコリと笑つた。

「完成しましたか、そろそろ昼食ができますのでそれまでに汗を落としてください」

レディーフースト。だからまず始めにサラを水場へ行かせる。

サラは「師匠より先に入るなんてとんでもない」とよく分からぬ所で恐縮していたが、俺が入るよう命令すると従つてくれた。

俺に対する敬意を持っているのは構わないけど、その使う場面が間違っているのではないかと考える。師匠の言葉に嫌な顔を浮かべて「えー」は無いだろ？。

そんなことを考えているとサラが上がつたらしく、次に俺に入る。
屋敷の一角に備え付けてある水道は特別製で、常にお湯が出るよう改造されている。この発明はエルファも嬉しかつたらしく「たまには良い」としますね」と呟いてくれたのが印象に残っていた。

「サラ、先程の工程は覚えているか？ 昼食を食べた後はサラが同じのを作るんだぞ」

「はい、バッヂリです。師匠の作品を超えた逸品を作り上げてみせます！」

その意気込みは素晴らしいが、空回りしないようにな。何せ後始末は俺がしなくちゃなんないから。

エルファさんが昼食を用意している間に俺は午後の予定を確認する。

「エルファさん、ティータさんから頼まれごとか何か無かった？」

「そろそろポーションが切れそうですので納品してほしいとか

パスタとスープを乗せた盆を運びながら受け答えするエルファン。

「うん、分かった。サラの鍛冶が終わり次第ポーション作成に取り

掛かるから準備をよろしく

「隠しました」

エルフアさんはそう述べた後、定位置に座つてバイオリンを響かせ始めた。

「そろそろかな」

「その通りかと」

来客室に備え付けられている椅子に腰かけていた俺の眩きにて控えていたエルフアさんが答える。

カラはいない。

と、いつもも昨日に「明日は修行なしだから実家で自己練習しろ」と言こと含めていたから来るはずがないだろ。

「主、お客様です」

「本当に、よく分かるな」

エルフアさんは気配を感じ取れる性質らしいへ、呼び鈴が鳴りなくとも来客が訪れるこことを察知できた。

「わひと、お迎えいたします」

エルフアさんは面もなく歩いて玄関に向かった。

派手な装飾が好かない俺は屋敷のそれを必要最低限に抑えている。

簡潔に言つたら揃えるのがめんどくさかつただけ。

だから生活必需品以外の家具はろくに買い足さなかつた。

が、エルファさんはそれが嫌だつたようだ。

お金がない時は自制していたみたいだが、余裕が出てきても装飾品に金をかけなかつた俺に業を煮やしたのかエルファさんは俺の許可なしに絵画や美術品を購入した。

その際に一悶着あつたのだが、ティータさんがエルファの擁護に回つたため俺が悪いということになつた。

「ボクは他人の田というのをもう少し気にした方がいいわよ。ここに来る人の相手をしているエルファの心情をくみ取りなさい」

と、逆に説教されてしまつた。

で、そこから反省した俺はとりあえず来客室くらいは見られるようになしようと頑張つた。

そして、頑張つた結果が。

「こちにちは、素晴らしい部屋ですね。金で出来た彫刻にプラチナの甲冑。まるで王宮にいるみたいです」

来客室に訪れる人が異口同音にそんなことを漏らすようになつてしまつた。

「やりすぎです。掃除する身にもなつてください」

そんな陰口を叩かれた覚えがある。

「お褒めいただき光栄ですヒュエテルさん」

目の前の人物はヒュエテル・クーラー。

俺が設立し、援助している孤児院の園長で、保母さんという表現がピッタリくる人だった。

年は40を超えてるので小太りだがそれが愛嬌として出ている。全てを優しく包んでくれそうな雰囲気を持つ人物だった。いつもニコニコと微笑んでいるのは母性からくるものなのだろう。そして、この笑顔こそがささくれた孤児を癒してくれていた。

「ユウキ様のご尽力によつて多くの孤児が悪の道に走らずに済みました。このことは感謝に堪えません」

そう言つてヒュエテルさんは頭を下げる。

金に余裕が出てきた俺はあのスラム街を何とかしようと思索していた。

キッカ達が何かをやらかしたので、俺は靴や服を作つてはスラム街に届けていたのだがスラムの環境が酷いこと酷いこと。

暴力や無関心が横行し、路上で人が死に、悪臭が漂つていてが日常の光景としてそこにあつた。

そして、何よりも一番衝撃を受けたのは俺やキッカと同年代の子

が盗みや暴行を働いているのを田撃したことだ。

「仕方ないわよ、ああしなければ生きられないんだから」

キッカが慰めてくれたが、平和な日本で暮らしていた俺には衝撃が大きすぎる。

この現状を何とかしたい。

と、言つても後数年で滅びる都市なので腰を落ち着けてやれることはできない。

さんざん悩んだ末に出た答えが未来ある子供たちだけでも救おうといふことだった。

だから俺は小規模ながらスラム街を何とかしようとしたまに炊き出しを行つているヒュエテルさんと接触し、彼女に孤児院の管理を任せた。

「いえいえ、僕のやつていることはお金を渡すことだけですから、実際に活動しているヒュエテルさんには敵いません。むしろ私が頭を下げたいぐらいです」

始めはヒュエテルさん一人とおんぼろ建築一戸なので、10人も世話できなかつたが、次第にヒュエテルさんの心情に共感してくれる人が現れ始め、さらに孤児達のリーダー格の人が協力してくれたので、今では4ヶタに迫る孤児達を保護できている。

そのことが可能になつたのはヒュエテルさんが孤児を救うために奮闘し、職員の増加や建物の増築など孤児院に関する責任を一手に

引き受けってくれていたからなので、俺としては頭が上がらない。

田の前のヒューテルさんは笑顔だが、その裏に壮絶な戦いがあつたのだと想像すると本当に申し訳なくなる。

「」謙遜を、資金がなければ何も始まりませんでした

そう言って貢えるのはありがたいが、俺は資金を渡しただけなので大した活動はしていない。

「いえいえ、私でなくとも他の人が援助したかもしれません」

「ユウキ様ほど多額の、そして安定して援助してくださる方は他にいませんよ」

属性付与させた武器と言うのは相当高値で売れる。何せそれを製造できるのはこの世界でも数えられるほどで、さらに俺以上の品質を作れる職人がないからその値段を具体的に言うと風の剣一振りあれば大人10人が1年遊んで暮らせるほどだ。

その金を資金として流していたから、普通の孤児院よりも数段立派なモノができるのは道理。

下手すれば貧乏な市民よりも豪華な生活を孤児達は送っていた。

「ヒューテル様、そろそろ本題に入りませんか

ちょうど良いタイミングで紅茶と菓子を運んできたエルファアさんが次を促す。

傍目から見るとエルファさんの態度は無礼かもしれないが、これがエルファさんなのでお互い何も言わない。

そして、ヒューホテルさんは居住まいを正すと徐に切り出した。

「ユウキ様の『』尽力によつてスラム街に巣食つ孤児はほぼ一掃されました。孤児達も施設での生活に戸惑つていましたが、現在は落ち着いています」

「それは良かった。スラム街の治安も良くなつたんじゃないかな」

俺の問いにヒューホテルさんは頷く。彼女曰く、まだ暴力は残つているものの1年前と比べると大分ましになつてきたそうだ。

「で、私としては次の段階に進めたいと思います」

「次の段階？」

俺が聞き返すとヒューホテルさんはゴクリと唾を飲み込み、意を決して話し始めた。

「スラム街の大改造を行いたいと思います。具体的に申しますと給金を彼らに払い、彼ら自身の手でスラム街を解体させます」

「……なるほどねえ」

ヒューホテルさんの提案に俺は考え込む。

スラム街に集う連中が全員悪の道に走るわけではない。中にはやむに已まらず故郷を捨ててそこに落ちぶれた人間もいる。

そして、彼らを更生させるこ一一番手つ取り早い方法は職を持たせること。

もちろんそう上手くいくとは限らないが、それでもあそこで腐らせるよりかはずっと建設的だろ。

が、ここで問題が出でくる。

それはこの都市があと3年ほどで滅びるといふこと。

つまりそんな大規模政策を行つたとしても効果が出る前に終わってしまう可能性が十分にある。

もしそうなると金をどぶに捨てるのみならず、何よりもヒューマルさんの願いを踏み躡る結果になりかねない。

「……僕的には孤児院に常勤教師を招き、孤児達全員に高等教育を施したいのですが」

そこから離れられない住居と違つて人なら移動できる。彼らがどこに行つても生きていられるよう訓練するのなら俺は金を出すと提案するが。

「しかし、私はスラムを何とかしたいのです」

「おそれべく3年後には全てが消えますよ」

「万が一となるかもしませんが」

「……信じてほしいのですが

実はこれまで何度も近いうちに国が滅びると訴えているのだが、誰も彼もが信じてくれなく、拳銃の果てには胡散臭い人間が寄ってきて寄付を迫つてくる始末。

「なら、じょうはどうですか？ その大規模工事は3年後に行うと、それまでの期間は区画整理や住民の説得などを行うというのは、」

「それなら納得です」

信じてもらえないのであれば妥協案を提示しよう。

どうせヒュエテルさんの構想は一朝一夕で出来るものではない。行つにしてもここまで大規模になると国の許可が必要だろう。そして何よりも大金が必要なのでこの提案には頷いてくれた。

「では、積立金として毎月これくらいはどうでしょつか」

「そうだなあ……」

ヒュエテルさんが予め試算してあつた金額を見て俺達はこのことで少々議論し合つた。

「さて、では今までの間、僕としては孤児達に高等教育を施すために教師を招きたいのですが、伝手はありますか」

「ボランティアの内数人が私塾の講師を行つています。の人達に

声をかければ了承してくれるかもしねません」

「それは良かった、早速お願ひします。で、給金の方は一般学校の教師より1割増しだといつことを打診して下さー」

「分かりました。しかし、給金1割増しといつ公表はまだ控えます」

「どうこいつことですか?」

俺が聞き返すとヒューホテルさんは少し笑つて。

「そのことを示すと単にお金に惹かれた輩が集まりかねません。それはなるべく排除したいので、まずはその事実を伏せておきます」

ヒュエホテルさんは孤児院の経営も兼ねていたので金勘定の力量が大きいについていた。おかげで巷では『金庫番』といつひとつ名までつけられている。

俺としてはそこまで徹底的にやつてもらつつもりはなかつたのだが、ヒューホテルさんは貰うだけでは申し訳ないと言つている。

まあ、払う分が減るに越したことはないけど。

その後、孤児院の現状や備品の過不足など細かい協議を終えたヒュエホテルさんは席を立ち、俺は玄関まで見送る。

ヒュエホテルさんが来訪したのはまだ日が高いうちだつたのだが、いつの間に完全に帳が下りている。

「実りの良い会合ができました。私達にここまで話をかけてください本当にありがとうございます」

と、礼を残して屋敷から立ち去つてこつた。

「変わっていますね」

2人きりになるとエルフアさんはそんなことを切り出し始める。

「普通孤児なんて見捨ておかれる存在ですよ。ですから国も知らぬ振りをするにも関わらず主は彼らを救おうとするのですね」

エルフアさんの問いに俺は背伸びをしながら頷く。

「これは俺の心によるものだな。俺のいた国では見捨てられる命なんてなかった。だからこの現状を見ると何とかしたくなるんだよ」

理屈ではない。

ただの感情であり、血口満足だと云はばが一瞬身に染みて分かつている。

「しかし、今のところは問題がありませんので田を廻る」といします。ただし、やりすぎには注意して下さい。いくら手を差し伸べたいとしてもそれで主が潰れるようでは本末転倒です」

「ああ、そこは分かっているよ」

「本気で危なそうでしたら私が無理やりにでも止めさせますから」

エルフアさんなりの忠告なのだろう。俺はそれに大きく頷いた。

「さて、そろそろ夕餉ですので主は少々お待ちください」

エルフアさんは一つ完璧な礼をして屋敷の厨房へと歩を進めていった。

浅はかな考え方

「さて、次はゼリフしようか」

夕食を食べながらそんなことを呟く。

「師匠、決まっているでしょうー。私にみつちりと教えることですよー。」

「……本当に元気だな、サラ」

俺はげんなりした眼でサラを見つめるが、サラは俺の感情などど吹く風でフフンとばかりに胸を張る。

「当たり前です。何故なら始めて5つの属性を付与させた武器の製造を田の当たりにしたのです。これが興奮せずにいらっしゃますか！」

そう、俺はつい先程まで7属性の内光と闇を除いた5属性を付与させた武器を製造していた。

簡単に見えるが実際は言語で語り尽せないほど難しい。

何せ火と水、雷と土と言ったよつた属性の相性というのがあるために各属性を相殺させないよつて絶妙なバランス感覚が必要になる。ところの属性を経験させるためだった。

最近サラは天狗になってきたのか遠慮もせずに多くの属性を付与

させた武器を作つてほしいと催促し、それがあまりにしつこいと感じた俺は不可能な課題を出してやつた。

サラの力量ではせいぜい三つの属性を付せるレベル。

おそらく成功しないだろう。

が、不安というものもある。

何せサラは天才だ、凡人たる俺の思惑など易々と裏切ってしまう展開が頭から離れない。

「……まあ、それでもいいか

俺を追い抜く風景が一瞬頭をよぎつたが、俺はそれを認めることにする。

その時は二つの属性全部付『させた武器でも作らせれば問題はないだろ』。

「で、とりあえず今日は飯食つたら寝る。今日は親に連絡しているだろうから問題ない」

早朝から製造を始め、完成したのがつい1時間ほど前。その間は気を抜くことが許されず、つきつきりで打っていたため、身体も精神も疲労がヤバい。今すぐにでも倒れたい気分だ。

「むー、師匠。つれないですねえ。ちょっとぐらい先程の鍛冶につ

いて教えて下さいよ

「頬をふくらませて剥れて俺を萌え殺せりつもりか？」

「師匠？ 何を言つてゐるんですか？」

「……忘れてくれ

どうも疲労によつて思考能力が変になつてゐる、俺は何て戯言を口走つてしまつたのだろう。

「明日だ、明日サラに同じものを作つてしまひから今日せよ寝ておけ」

「しかし、私は興奮で眠氣など起きないので」

「やうなのか？」

「はい、今にでもそいつを笑いながら走りたい衝動に駆られています」

どうやらサラは疲労が一線を越えるとテンションがハイになるらしい、新たな発見に俺は何となく頷く。

が、そんなことをしてゐる場合ではないので俺は課題を出すことにする。

「それなら宿題だ。今、ヒルファがベットを整えているからそれが終わり次第そこで5分近くじつとしている」と

「嫌ですよ、私は眠る気分じゃないんです」

サラがそう言つていねるので俺は新たな言葉を紡いだ。

「5分間ベッドで横になつていれば今すぐ5つの属性を付与せた武器を作つても良いぞ」

「分かりました、約束は守つて下さいね！」

サラはそれを聞くやいなや2階の寝室へすつ飛んで行った。

20分後

「御馳走様」

「御粗末様です」

エルファさん曰く、サラはベッドに入つてしまはくは目がギンギンに冴えていたようだが、突然スイッチが入つたかの様に眠りにつたようだ。

あまりに予想通な展開に俺は苦笑するしかない。

「さて、俺も寝させてもらひつぞ、戸締りは任せぬ」

欠伸を一つした俺は食堂を出でいった。

鍛冶場には俺とサラの2人しかいないが、その場は和氣藹藹とした雰囲気でなく悲壮感に充ち溢れていた。

「サラ。もう分かつただろ、今のお前には無理だ」

もう何回言つただろ、数えることすら億劫になる程繰り返した台詞を紡ぐのだが。

「もう一度だけ、もう一度だけチャンスをお願いします」

サラは付与に失敗し、跡形もなくなつた剣を握りしめながら涙ながらに訴えた。

始めは驕り気味のサラに炎を据えるつもりで今回の提案を出したのだが、ハッキリ言つて今は後悔している。

てっきり俺はあまりの難しさに諦めて素直に俺の教えを請うと予想していたのだが、まさかサラは困難にぶち当たるとボロボロになるまで挑戦するタイプだとは知らなかつた。

「師匠命令だ、明日にでもやれ」

俺は溜息を吐くとサラにそう中止を命令する。

無論サラは抵抗したのだが、すでにハンマーすら握れないほど手がボロボロになつていることを指摘すると不承不承ながらも頷く。

「また明日やりますから」

去り際にその言葉を残していくのが印象的だった。

2、3の属性を付与させるこはともかく、4つ以上になると相反する属性を同居させるために一般の鍛冶屋には置いていない特殊かつ巨大な設備が必要なので俺の鍛冶場は一辊10mという広さを持つていた。

そこにポツンと一人残された俺は先程までサラが打っていた失敗作を拾い上げる。

それは付与された属性同士が反発して無残な形となつた剣だが、前のと比べると僅かにだが出来が良い。この調子だといずれかは成功するだろうと思われる出来だった、が。

「その前にサラが壊れそうだな」

悲しいかな、今のサラは才能に肉体が追い付いていない。

「の調子だとサラに致命的な何かが起つことは十分に予想できた。

一応俺はサラの師匠なので、弟子であるサラの面倒を見なければならぬ。

で、サラが「のままだと不幸な結果が待ち受けているのならやることは一つだ。

「俺はサラにしばらべに来るなと言わなければならぬな」

突然の禁止にサラは混乱するだらつ、もしかすると勝手に鍛冶

場へと侵入するかもしない。

「言い訳かもしれないが鍛冶自体を禁止するわけじゃないぞ

サラの身が危険なのはあくまで4つ以上属性を付与せることで2、3の属性付与させた武器の生成を禁止しているわけではない。

そして、4つ以上は俺の鍛冶場のような設備が無いと無理であり、この設備が置いてあるのは王宮公認の鍛冶屋か研究施設のみだろう。

「まあ、何を騒ごうともこれは俺の浅はかな行為が招いた結果に変わりはないけどな」

全てでは俺が5つの属性を付与させた武器を作らせたことである。

身を切り刻まれる悔恨に顔を歪めながら俺は自嘲した。

「今日で4日目ですね」

エルフアさんの言葉に椅子に座っている俺はゆっくりと頷く。

俺はサラに療養を言い渡そうと表情を硬くして待ち構えていたのだが、サラはあの日以来一向に姿を見せていなかつた。

自宅へ帰つて頭を冷やし、今の自分では完成できないと自覚して体を休めているのなら好ましいが、おやぢやへりつけではない。

あのサラの性格上、もう意志でここに来る「ことを止める」とはありえない。

十中八九サラの容体を重く見た両親が止めたのだろう。

「迎えに行くのですか」

エルフアさんは聞いに俺は心配る。

サラは未熟だが、いずれは世界最高の鍛冶師になる可能性を持つ逸材。

休養をせぬなりまだしも、一度と鍛冶に触れさせなことされたり俺は悔やんでも悔やみきれない。

「馬車を用意してくれ」

俺の要望にエルフアさんは「理解しました」と礼をしてこの場を去っていった。

邊引き（前書き）

サラの話は次で終わりです。
やれやれ、本来なら1話で終わらせる予定だったのに……

世界最高峰の鍛冶職人といつ名は伊達でない。

高名な冒険者も大富豪も俺の武器を求めるため俺はあまり外へ出られないし、所用があつて外出するにしてもこの馬車のよう意外から中の様子が伺えない様カーテンで外部と遮断されていた。

「まあ、有名税といったところか」

俺はフフンと鼻で笑いつことにする。

と、いうか笑うしかない。一体何が悲しくて屋敷の外から出られない実質軟禁生活を送らなければならないのか自問してしまったまゝここは優越感に浸つておくことにしている。

「が、今はそんなことを考へている場合でない」

ダークサイドに陥るのは後でいい、今はもっと大事なことがある。灯りがランプしかない中で俺は帽子やマフラーなどで顔を隠して準備をした。

エルファさん曰く、サラの実家は中堅どころの鍛冶屋らしくそれほど人気があるわけではないにしろ、それでも客はいるので変装しておいた方が良いとアドバイスをされたから。

正直な話、この程度で騙せるかなと不安だったのだがエルファさんは。

「経験上、人なんて顔さえ隠せば大概何とかなるようなものです」

と、非常に説得力がある言葉を紡がれたため俺は観念して従つた。変装を終えた俺は腕を組んでこれから起ることを予想してみる。サラから的情報によると、自分は一人娘で他に子供はないことからサラの両親はサラを目に入れても痛くないくらい溺愛しているだろう。

そして俺はその愛娘に無理をさせてしまった。

サラの両親の怒りは相当なものだろうと予測できる。

「今日はサラ本人に会う」とは出来そうにはないな

アポもなしに突然訪れたのだから当然として、多分な親の怒りをぶつけられることは覚悟しておかねばならない。

「まあ、それは俺の所業に対する罰として受け止めればいいか

重要なことは如何にこちらの誠意を相手に分からせるかだ。

確かに今回俺はサラを傷つけたが、それはサラの才能が大きすぎたから。嫉妬の感情も交じっていたと正直に述べよう。その上でサラの素直さを褒め称えれば両親も理解してくれるだろう。

「よし、これでいいわ

俺が頷くと同時に振動が大きくなつたのは、石畳が敷き詰められている地区に変わつたからだろ？。

「」到着しました

その言葉と同時に業者は恭しく扉を開ける。

その通りはティータさんが薬屋を営んでいる地区と比べるとやはり活気が劣るもの、その場所に漂う空気は実戦向きといふか緊張感が溢れている。

そこを行きかう人を眺めても、油断ない雰囲気を漂わせてゐる」とから熟練の冒険者達だといふことが分かつた。

古びた石畳を通り抜け、少し奥まった場所にある年季の入つた店の前で俺は立ち止まる。

『キュリアス鍛冶屋』

「」が俺を師匠と呼ぶサラ＝キュリアスの実家とみて間違ひなかつた。

「さて、入るとするか」

俺は「」に発破をかけ、唾を飲み込んでから中へ入つた。

入つて2歩も歩かないうちにカウンターがあり、武器が壁に所狭しと並べられている。

少々狭いのではないかと感じたが奥から鉄を打つている音が響いてくることから売り場と鍛冶場、そして住居区がこの場所に詰め込まれているのだろうと考えると納得できた。

「あら、こらつしゃい旅人さん。今田はどうな依頼で」

やう店内を見回しているうちに奥から40代半ばの物腰の良い年配の女性が出てきた。

よく見ると田の辺りとかサラの面影が見えるのでサラの母親ではないのかと推測する。

「あら、どうしましたか？ 何か私の顔についていますか」

頬を撫でながらそう聞いてきたので俺は首を振った。

俺は気付かなかつたが、長い間彼女を見つめていたのだろう。それは反省せねば。

と、まあそこいら辺は置いて俺は本題を切り出す。

「サラの師匠、コウキ＝カザクラが参つたと伝えてください」

俺がそう述べると、サラの母親はビシリと硬直した。

「……」

これ以上言葉を重ねても意味がないだらつと判断し、俺は口を紡いで相手の判断を待つ。

1分、2分とお互い沈黙を保ったまま時が過ぎる。

「主人を呼んできます」

サラの母親は辛うじてそう告げるべくさとその場を後にした。で、残された俺は扉にもたれかかって相手が出てくれるまで待つことにした。

「の間は非常に長く感じられる。緊張してのどが渴き、気持ちが落ち着かないで視線をあちこちに彷徨わせて気分を紛らわせる。一瞬外に出ようかと頭に過ったが、ここでそんなことをしてしまつと一度と来れないという確信があった。

そんな風に自問していると、奥からの音が止んで誰かがこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「ここからが本番か

俺は唇を凸凹で運らせながら呟いた。

世の中には不条理とつものが存在する。

「ちがいいくら友好を訴えようとも、手を取り合つていこうと手を差しても相手がそれの聞く耳を持たなければ意味がない」とい

う」とだ。

俺は今、その不条理を心の底から味わっている、何せ。

「……問答無用で外に放り出されるとは思わなかつたな

俺は服についた土ぼこりを払いながら毒づく。

あの時、サラの父親が現れたので俺はサラが如何に素晴らしいか、今後このようなことは起きないよう宣誓しようかと口を開いたのだが、言葉が出る前に俺は胸を掴まれて外へと投げられた。

まさかサラの父親がいきなりそんな強硬手段を取つてくるとは思いもしなかつたので俺はさしたる抵抗もできず、なすがままに任せしかなかつた。

で、俺としてはこのまま終わるわけにはいかなかつたので、もう一度中へ入ろうとしたのだが扉は固く閉ざされている。

なるほど、つまり俺と話すつもりは全くないということか。

「せめてサラとお話ししてさせてください」

俺は扉をガンガンと叩きながら訴えるが返事は全くない。

仕方ない、根勝負と行くか。

俺が叩くのをやめるか向こうが俺を招き入れるのが先かと考えたのだ、が。

「おー、ドアを叩いてこる少年はもしかするとコウキ＝カザクラじやないか？」

いつの間にか仮面が取れていたらしく。俺は慌てて装着するがすでに後の祭り。

「のままだと取り囮まれて身動きが取れなくなると判断した俺は止めてあつた馬車に乗つてこの場を後にする。

「……仕方ない、最終手段といふか

乾いた唇を舌でペロリと舐めて俺はそのことの算段を始めた。

夜　「の世界には電気というものがいため、必然的に明かりはランプなど油を使ったものになる。油は貴重なため、わざわざ街灯にするのは宿場街などよほど人の出入りが多いところだけ。

こんな一角など存在しているはずがないだろ。」

明かりは外から漏れてくる光と月と星の光のみなので夜中遅くなると安全のため家に泊まらせた理由もこの暗さなら納得のいくものだ。

こんな場所で襲われたらおそらく完全犯罪が成立してしまうだろう。

「今はこの暗さがありがたいな」

で、俺はといえばその闇夜に紛れてサラのいるあたりへ階の部屋のランダによじ登っている。

フロザーブースを使って己の体重が軽くなつたとはいえ、この代物は空を飛べるわけではないので俺はフック付きロープを併用していたわけだ。

「これで見つかつたら言訳できな」

「さて、エルファさんからの情報によると今がサラは一人の時間帯だな」

一体どこで調べたのか、エルファさんはキュリアス家の部屋配置はおろか全員のスケジュールまで割り出していた。

「これぐらい造作もありません」

素でそんなことを言つてのけたエルファさんにアドレットした俺を責められるものはないだろ？

閑話休題

俺は一つ咳払いすると膝をコンコンヒノックする。

「誰ですか？」

じぱりとするとやや緊張気味ながらも返事をしてくれた。

今は少し張りがないが、その声はサラだらう。サラの両親でなく
てホツとする。

「サラ、俺だ」

近所迷惑にならない程度でそつ囁くと、突然カーテンを引かれ、
窓を開けられた。

「師匠？ どうしたんですかこんな時間に！？」

サラは突然現れた俺に混乱しているのだろう、目を丸くしている。

「シーツ！ それを含めて説明する。だから中に入れてくれ」

俺の要望にサラは頷き、俺を中へ招き入れた。

「ありがとう、おかげで助かつた」

サラの部屋に潜り込んだ俺はサラに一礼。もしあそこで叫ばれてもすれば俺は決死の逃避行を演ずる羽目になつていた。

で、サラの部屋を見渡した印象が。

「……独特的の部屋だな」

俺は苦笑いするしかない。

俺の偏見かもしれないが、普通女の子の部屋というものは人形や
服など可愛い物が置いてあるものだと考えている。

しかし、サラの部屋は。

「どうですか？」このブラックアックス！　これは師匠ほどではありませんが、有名なギルロティ＝イエスマントが闇属性を付与された逸品です。さらにこのアイスランスは……」

部屋の壁一面に飾られているのは武器。

それもほとんどが属性付きとこり高価な物ばかりだ。

サラの両親の身なりや店の規模からあまり繁盛しているとは考え難いので一体これらの武器を買つお金はどこから出でたのだろ？「ああ、これは私が生成した武器と交換したんですよ。私はこの都市でナンバー2を自負していますから。あ、もちろん一位は師匠ですよ？」

どうやらサラは商品として販売できるほどの技術を身に付けていたらしく。俺は誇りしげに反面寂しい気持ちになる。

「で、師匠は何故来たのですか？」

そんなことを考へているとサラはそんな質問をしてきたので俺は咳払いを一つして口を開く。

「今日の俺に尋ねたのだがそれは知らないか

その答えに首を傾げる様子からサラの両親は俺が来たことを伝えていないようだ。まあ、俺が来たことなんて知つても両親にとつて

は面倒が増えるだけだから正しい選択かもな。

「まあいい。俺が来た理由は簡単だ、サラの様子が知りたくてな。あの日から来なくなつて心配したぞ」

「アハハ、ありがとうございます」

俺の言葉にサラは唇を締め、眉間にへたり、じつめに両親との間で何かあつたようだ。

「サラ、どうした？ 元気がないぞ」

俺はさりげなく近づいて聞くと、サラはキッと眼を上げて俺を見上げた。

「師匠、私を連れて行つてくれださい」

「は？」

思わず間抜けな声を出してしまった俺を責められる者はいないだろつ。が、サラは続けて。

「両親は私に一度と鍛冶に関わらせようとしません。そういう娘としての人生を歩んでほしいみたいです」

「まあ、両親からすればそれが一番だろつな。誰が子供に好き好んで苦難の道を歩ませるものか」

俺に弟子入りするといい、これら高名な鍛冶師の武器と交換できる腕前といい、サラの行動力と才能は常軌を逸している。

「鍛冶に関わる以上サラはまともな人生など歩めまい。下手すれば想像を絶する不幸が待っているだろうな」

「勝手に決めないでほしいです！ 誰が何と言おうと、地獄が待つていようと私はこの道を選びます」

サラは脊髄反射の様に俺に飛びかかつて胸ぐらを掴む。

「サラ、詰め寄る相手が違うだろ？ 俺に食つてかかるって仕方がない」

「ああ、そうでした。ごめんなさい、興奮しまして」

タハハと笑つて俺から身を離すサラ。

先程までサラの瞳がすぐそこにあったので動搖を見せないようポーカーフェイスを保つのに苦労した。

「とりあえず俺は3日後にまた来るからそれまでに答えを決めておけ」

「何ですか？ すぐに行きましょう」

そう言つて急かすサラを見て俺はため息が漏れる。

「サラ、今のお前は混乱している。突然親から鍛冶を取り上げられ、そして俺が現れたから冷静な判断を下せない状態だ。そんな状態で俺についてきてもサラが苦しむだけだぞ」

俺は窓に手をかけて外に出る準備を整え、最後にこう言い残した。

「最後にだが俺もサラの両親もお前のことを気遣っている。だからサラが鍛冶を捨てても俺は引きとめたりはしない」

まあ、口ではそう言いつつも本心では3年後の魔物大進行が起ころ前にサラを助け出して鍛冶に関わらせるつもりだが。

俺は個人の幸せのためなら才能を腐らせてもいいと唱える善人ではないぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709w/>

ゲームの世界で第二の人生！？

2011年11月20日00時26分発行